

# 御笠の森遺跡 9

— 第4・7次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第208集

2023

大野城市

みかさ もりいせき  
御笠の森遺跡 9

— 第4・7次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第208集



2023

大野城市

## 序

大野城市は福岡平野の一角にあたり、北側に大城山、南側に脊振山系が広がる縦長の市域を有しており、その形はよくヒョウタンに例えられます。

今回報告する御笠の森遺跡は、山田2丁目にある御笠の森を中心に広がります。これまでの調査で、11世紀中頃から17世紀後半にかけて「山田村」と呼ばれた集落遺跡が確認されており、大野城市の代表的な中世遺跡の一つです。本書で報告する第4・7次調査は、共同住宅建設を契機に調査が行われたものです。調査では弥生時代から江戸時代の遺構・遺物が見つかり、遺跡の性格を考える上で貴重な成果となりました。

『日本書紀』には、神功皇后がこの辺りを通りかかった時に、笠を吹き落とされた話が残されています。さらに『筑前国統風土記』には、笠が森の梢にひっかかったという伝承が記されています。これらの記録から、御笠の森遺跡周辺には古代から道が通り、人やモノが行き交っていたことが分かります。御笠の森遺跡はこの道を中心に発展した村であり、博多・大宰府を通じて中国や朝鮮半島とも交流していることが分かりました。

中世村落の調査成果は、明治22年に11カ村で発足した大野村の原形を明らかにするものです。本書が中世から近世の大野城市の歴史に厚みを加え、その解明に寄与することを期待しています。

最後になりましたが、事業者をはじめ地元の方々にご協力とご理解をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

令和5年3月31日

大野城心のふるさと館

館長 赤司 善彦

## 例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が発掘調査を実施した御笠の森遺跡第4・7次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大野城市教育委員会が実施した。
3. 整理作業は、大野城市の単費事業として実施した。
4. 本書における遺構の分類番号は、SA：櫓・土塁・塀、SB：掘立柱建物、SC：堅穴住居跡、SD：溝、SE：井戸、SF：道路状遺構、SH：広場、SJ：甕棺墓、SK：土坑、SP (P)：ピット、SR：祭祀遺構、ST：古墳・木棺墓・土坑墓・石棺墓、SX：性格不明遺構とした。
5. 発掘調査は、第4次調査を徳本洋一、第7次調査を石木秀啓が担当した。
6. 遺構写真は、徳本・石木が撮影した。
7. 遺物写真は、写測エンジニアリング株式会社(牛嶋茂)が撮影した。
8. 遺構図面の作成は、大野城市教育委員会が行った。
9. 遺構図の方位は方位北を表す。
10. 遺物実測図は、小畑貴子・古賀栄子・小嶋のり子・篠田千恵子・白井典子・津田りえ・仲村美幸・氷室優・松本友里江が作成した。
11. 製図は、小嶋が作成した。
12. 拓本は、小畑・篠田・氷室・松本が作成した。
13. 観察表は、小嶋が作成した。
14. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「福岡南部」を使用した。
15. 発掘調査で出土した遺物の分類基準は、以下の文献を参考とした。また、陶磁器の産地・年代については、佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問 大橋康二氏の指導・助言を頂いた。  
日本貿易陶磁研究会1982『貿易陶磁研究No.2』  
山村信榮1990「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会  
柳田康雄1991「2土師器の編年 九州」『古墳時代の研究』6 雄山閣  
中島恒次郎1992「大宰府における埴形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』日本中世土器研究会  
中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社  
太宰府市教育委員会2000「大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—」  
九州近世陶磁学会2000「九州陶磁の編年」  
江戸遺跡研究会編2001『図説江戸考古学研究辞典』柏書房  
山本信夫1990「統計上の土器」『乙益重隆先生古稀記念論文集 九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会
16. 本書の遺物・実測図・写真はすべて大野城市が管理・保管している。
17. 本書の執筆は石木・石川健が行い、編集は石川が行った。

# 本文目次

I. はじめに	
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査体制	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の結果	9
1. 第4次調査	
(1) 調査概要	9
(2) 遺構と遺物	10
(3) 小結	28
2. 第7次調査	
(1) 調査概要	29
(2) 遺構と遺物	30
(3) 小結	36
IV. まとめ	44
1. 御笠の森遺跡第4・7次調査成果について	44
2. 御笠の森遺跡周辺遺跡の中世～近世の動態について	44

# 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	6
第2図 御笠の森遺跡と調査区の位置図 (S=1/2,500)	7
第3図 御笠の森遺跡第4次調査遺構配置図 (S=1/150)	9
第4図 第4次調査 SD01実測図 (S=1/80)	10
第5図 第4次調査 SD01出土遺物実測図① (12はS=1/4、その他はS=1/3)	12
第6図 第4次調査 SD01出土遺物実測図② (14・15はS=1/3、その他はS=1/4)	13
第7図 第4次調査 SD01出土遺物実測図③ (40はS=1/2、その他はS=1/3)	14
第8図 第4次調査 SK01実測図 (S=1/60)	15
第9図 第4次調査 SK01・SK02出土遺物実測図 (S=1/3)	16
第10図 第4次調査 SK02実測図 (S=1/60)	17
第11図 第4次調査 SK02出土遺物実測図① (S=1/3)	19
第12図 第4次調査 SK02出土遺物実測図② (S=1/3)	21
第13図 第4次調査 SK02出土遺物実測図③ (100～102はS=1/2、その他はS=1/3)	22
第14図 第4次調査 SK02出土遺物実測図④ (103はS=1/3、その他はS=1/2)	23
第15図 第4次調査 ビット出土遺物実測図 (108・120・128はS=1/2、その他はS=1/3)	24
第16図 第4次調査 ビットおよびその他の出土遺物実測図 (132・134はS=1/2、141はS=1/4、 その他はS=1/3)	26
第17図 御笠の森遺跡第7次調査遺構配置図 (S=1/200)	29

第18図	第7次調査	SD01実測図 (S=1/80)	31
第19図	第7次調査	SD01・SD02出土遺物実測図 (147はS=1/2、その他はS=1/3)	32
第20図	第7次調査	SD02実測図 (S=1/80)	33
第21図	第7次調査	SX03実測図 (S=1/60)	34
第22図	第7次調査	SX03出土遺物実測図 (S=1/3)	35
第23図	第7次調査	SX05・07・19・24・27およびその他の出土遺物実測図 (173・175はS=1/2、その他はS=1/3)	36
第24図	御笠の森遺跡周辺の中世～近世遺跡と条理地図 (日野1976に加筆)		45

## 表 目 次

表1	御笠の森遺跡既往調査区一覧	8
表2～7	御笠の森遺跡第4次調査出土遺物観察表①～⑥	37～42
表8・9	御笠の森遺跡第7次調査出土遺物観察表①②	42・43

## 図 版

図版1	(1) 第4次調査 調査地全景 (西から)	図版7	(1) 第7次調査 SD01 a-a' 面土層 (南から)
図版2	(1) 第4次調査 調査地東半部全景 (北から)	(2) 第7次調査 SD01土層 (北から)	
	(2) 第4次調査 調査地西半部全景 (北から)	図版8	(1) 第7次調査 SD02 (南から)
図版3	(1) 第4次調査 SD01 (南から)	(2) 第7次調査 SD02 (北から)	
	(2) 第4次調査 SD01 (北から)	(3) 第7次調査 SD02陸橋部 (東から)	
図版4	(1) 第4次調査 SK02 (南から)	図版9	(1) 第7次調査 SX03 (南東から)
	(2) 第4次調査 調査風景	(2) 第7次調査 SX03遺物出土 状況 (南東から)	
図版5	(1) 第7次調査 調査地西半部全景 (東から)	図版10	第4次調査出土遺物①
	(2) 第7次調査 調査地東半部全景 (西から)	図版11	第4次調査出土遺物②
図版6	(1) 第7次調査 SD01全景 (東から)	図版12	第4・7次調査出土遺物
	(2) 第7次調査 SD01 a-a' 面土層 (北から)		

# I. はじめに

## 1. 調査にいたる経緯

御笠の森遺跡は、大野城市山田2丁目にある御笠の森を中心に広がる遺跡である。現在は住宅が建ち並んでいるが、昭和期前半の写真には、水田の中に浮島のように広がる森を見ることができる。昭和63年に福岡県教育委員会による発掘調査が行われて以降、19地点で調査が行われてきた。

今回報告を行うのは、第4・7次調査の成果についてである。なお、これまでの御笠の森遺跡報告書では、御笠の森遺跡第7次調査は調査後に川原遺跡に含まれることが明らかになったことから遺跡名を変更する旨の記載をしていたが、調査時の遺跡名と調査次数を尊重することとした。調査期間並びに調査地番・調査原因等については、以下のとおりである。

調査次数	調査地番	調査面積 (㎡)	調査原因	調査期間
第4次調査	山田2丁目227-2	529	住宅建設	平成2年6月21日～7月13日
第7次調査	山田1丁目520-1	358	住宅建設	平成10年9月14日～11月6日

## 2. 調査体制

各調査時及び整理作業時の調査体制について以下に記す。

### [平成2年度]

教育長	久野 英彦
教育部長	後藤 幹生
社会教育課長	岡部 弥之助
社会教育課長補佐	白水 岩人
主査	舟山 良一
主事	浦山 敏弘
技師	向 直也、徳本 洋一 (第4次調査担当)
嘱託	秀嶋 和子

### [平成10年度]

教育長	堀内 貞夫
教育部長	高橋 正治
社会教育課長	片岡 猛
文化財担当係長	舟山 良一
主任技師	向 直也、徳本 洋一、石木 秀啓 (第7次調査担当)
技師	丸尾 博恵
嘱託	明永 美和
整理補助員	武下 里織、境 聡子

[令和4年度]

市 長	井本 宗司
地域創造部長	増山 竜彦
大野城市心のふるさと館	
心のふるさと館長	赤司 善彦
文化財担当課長	石木 秀啓 (整理担当)
文化財担当係長	林 潤也、上田 龍児
主査	徳本 洋一
主任主事	秋徳 敏明
主任技師	山元 瞭平
技師	齋藤 明日香
会計年度任用職員	澤田 康夫、石川 健 (整理担当)、深町 美佳、山村 智子 照屋 真澄、小川 久典、清水 康彰、大塚 健三

[整理作業員]

小畑貴子・古賀栄子・小嶋のり子・篠田千恵子・白井典子・津田りえ・仲村美幸・氷室優  
松本友里江



## II. 位置と環境

福岡県大野城市は、福岡県西部にあり、市域は南北に長く、よくヒョウタンの形に例えられる。福岡平野の奥部に位置し、東部は特別史跡大野城跡が所在する四王寺山や乙金山、北部は三郡山からのびる井野山・月隈丘陵、南部は脊振山・牛頸山からのびる丘陵が続く。中央は平野部にあたり、国道3号や九州自動車道、西鉄天神大牟田線・JR鹿見島本線など、主要な交通路が通る。

御笠の森遺跡は、御笠川の西岸の沖積地に立地する。御笠の森遺跡の位置する福岡平野周辺は東アジアとの交流の窓口として、朝鮮半島をはじめ古代より各地域の文化の往来が活発な地域である。御笠の森遺跡の歴史的環境を明らかにするため、市内の遺跡を中心に、周辺遺跡の歴史的環境を述べていくことにしたい。

### 旧石器時代

大野城市内では、釜蓋原遺跡・雉子ヶ尾遺跡・松葉園遺跡・出口遺跡・横峰遺跡において遺物の出土が確認されており、北部の乙金山・大城山や南部の牛頸山からのびる丘陵地帯を生活の舞台としていたことが知られる。

### 縄文時代

縄文時代においても、遺跡立地は旧石器時代と同じような様相を示し、南北の丘陵地帯に多くの遺跡が形成される一方、石勺遺跡や原ノ口遺跡でも押型文土器などが出土しており、早期より平野部の微高地上に活動が認められ、活動の範囲が徐々に広がっていく。

### 弥生時代

福岡平野の弥生時代を代表する遺跡といえば、板付遺跡が挙げられる。板付遺跡は、弥生時代早期には集落の出現が認められ、前期には台地上に環濠集落が営まれるようになり、後期初頭に於いて福岡平野の拠点集落として機能している。墓地としては、三郡山地から西へ下る丘陵上に御陵前ノ椽遺跡、塚口遺跡、中・寺尾遺跡、金隈遺跡などが営まれており、脊振山地から北へ派生する春日丘陵上には伯玄社遺跡が営まれる。

中期に入ると、春日丘陵上に多数の集落と墳墓が営まれるようになる。特に甕棺墓を中心とする墳墓群は著しい増加を見せるが、中でも特筆されるのは中期後半に位置付けられる須玖岡本遺跡であり、奴国王墓と考えられる。本堂遺跡では、中期後半から末頃の堅穴住居跡などが確認されたが集落の在り方としては小規模・短期的なものであり、墳墓も梅頭遺跡3次調査で甕棺墓が1基確認されたのみで大規模な造墓は認められない。上園遺跡では、9次調査地で中期後半の堅穴住居跡が確認され、本堂遺跡を中心とする集落が広がっていたことが分かる。

後期に入っても須玖岡本遺跡群ではなお盛んに青銅器生産がおこなわれており、比恵・那珂遺跡群では首長居館に類する環溝の存在から、規模が拡大する様子が明らかである。駿河遺跡では堅穴住居跡が確認され、鉄器や青銅製鋤先などが出土しており、拠点的な集落と考えられるが、牛頸川の南側から大宰府にかけての地域は集落が存在するが小規模なものである。

## 古墳時代

古墳時代に入ると、福岡平野周辺にはたくさんの古墳が造られるようになる。那珂八幡古墳・原口古墳といった大型前方後円墳のほか、福岡平野の南北の丘陵上には小規模な円墳・方墳などがまるとまって営まれる。御陵古墳群・宮ノ本古墳群・炭焼古墳群では前期からの墳墓群が認められ、該期の古墳群が拠点的に分布していることが分かる。

集落は、比恵・那珂遺跡群で外来系土器の搬入が多く認められ、一大交易センターであったとの位置付けがされている。一方、やや内陸に入った瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡、本堂遺跡、殿城戸遺跡でも集落遺跡が確認されるが、大規模なものではない。

5世紀代になると、老司古墳で初めて横穴式石室が築かれる。野藤1号墳・貝徳寺古墳などの那珂川流域における前方後円墳の築造が活発なのに対し、御笠川流域では笹原古墳・成屋形古墳・古野古墳群が築かれるが、帆立貝式前方後円墳・円墳を中心としており、明らかな格差が見られる。塚原古墳群は牛頭川流域に位置し、5世紀後半から造墓を開始しており、新たな群集墳が営まれる。集落は比恵・那珂遺跡群が停滞する様相を見せており、立花寺B遺跡では5世紀後半にはじまる大規模な集落が確認される。また、上園遺跡や中・寺尾遺跡・金山遺跡などでは小規模な集落が営まれる。

6世紀代になると、継体天皇21年(527年)北部九州を舞台とする磐井の乱という大事件が起こり、北部九州の支配体制に大きな変化が認められる。こうした変化は遺跡の推移にも現れており、先述した牛頭塚原古墳群やカクチガ浦古墳群など5世紀代に造墓を開始した群のうち、6世紀前半から中頃に境にして造墓を停止する群がある。後半になると、福岡平野南北の丘陵上には小古墳が爆発的に築造されるようになる。群の中には、観音山古墳群中原I-1号墳のように全長30m以下の前方後円墳を含むものもある。また、善一田古墳群では直径26mの円墳を群内に含み、新たな地域首長の発生を認めることができる。牛頭窯跡群周辺では、牛頭中通古墳群・後田古墳群・小田浦古墳群は須恵器工人の古墳群とされる一方、梅頭遺跡群では窯を墳墓に転用した事例が知られており、須恵器工人の多様な墓制の在り方が認められる。また、6世紀中頃に操業を開始する牛頭窯跡群は次第に規模を拡大し、その製品は福岡平野周辺一帯に供給されている。集落では、比恵・那珂遺跡群は6世紀後半以降規模を拡大し、那津官家があった可能性が指摘されている。薬師の森遺跡や牛頭塚原遺跡においても集落の拡大が見られ、鉄器生産や須恵器生産の拡大と関わりがある。上園遺跡では6世紀中頃に集落が拡大するが、7世紀になると衰退しており、牛頭窯跡群操業を契機に始まった集落の不安定さが指摘できる。

## 飛鳥時代～奈良時代

7世紀前半代は、前代に築造された古墳への追葬や新規の古墳築造が認められるが、664年から665年におこなわれた水城・大野城の築造を契機としてこの様相が一変する。この時期に比恵・那珂遺跡群にあった那津官家は現在の太宰府市に機能が移り、大宰府政庁が成立すると考えられる。上大利・春日・大土居・天神山には小谷を塞ぐように小水城が築かれ、大野城・水城とともに大宰府を囲む羅城として機能している。

大宰府は西海道を統括する地方最大の役所である。7世紀後半は政庁I期段階にあたり、大宝律

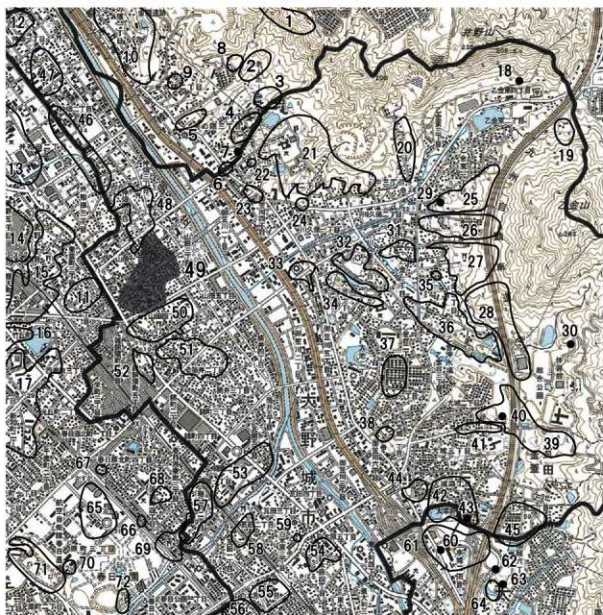
令施行以後の政庁Ⅱ期（8世紀前半以降）段階には条坊の整備も進み「天下之一都会」と謳われる。大宰府政庁・条坊の整備とともに官道の整備も進められ、谷川遺跡や春日公園内遺跡では水城西門ルート、板付遺跡や高畑遺跡などでは東門ルートが確認されている。官道沿いには新たな集落や官衙遺構の展開が認められ、高畑遺跡では木簡・「寺」銘墨書土器・瓦などの出土遺物や伝承から高畑庵寺あるいは那珂郡衙の可能性が指摘されている。また、井尻B遺跡では井尻庵寺の想定がなされ、麦野遺跡群・南八幡遺跡群・雑餉隈遺跡群では8世紀の大規模な集落が認められ、水城からのびる東西ルートの官道間の狭い地域に広がる集落遺跡の性格について解明が望まれる。牛頸窯跡群は8世紀前半には和銅六年銘ヘラ書き須恵器より、調納物としての貢納があったことが判明した。その製品は肥前・豊前・肥後国など北部九州各国にもたらされることが胎土分析の結果より判明し、西海道下随一の窯業地帯として盛んに煙を上げている。

#### 平安時代～戦国時代

前代に隆盛を極めた大宰府も、9世紀に入ると遺構・遺物量が激減しており、停滞する様相を見せている。こうした状況は周辺集落にも表れており、麦野遺跡群等に見られた大規模な集落は姿を消す。また、西海道最大の須恵器生産地であった牛頸窯跡群も、9世紀に入ると生産量が減少し、9世紀中頃には操業に肥後地域の工人の参画が想定できるなど、生産が衰退・終了へむかっている。栗師の森遺跡や天神田遺跡、谷川遺跡や上大利小水城周辺遺跡では、瓦器焼成遺構や棒状土製品が多量に見つかっており、瓦器生産が盛んに行われたことが窺える。平安時代も後半になると律令体制は崩壊し、武士が活躍する時代を迎える。大宰府政庁・鴻臚館の機能は中世都市「博多」に移る。本堂遺跡では、谷部から10・11世紀代の遺物が大量に出土しており、上園遺跡やその周辺の遺跡からも同時期の集落が増加し、このあたりが大利村であったと考えられる。後原遺跡・御供田遺跡でもこの時期に集落が出現しており、白木原村の萌芽と考えられる。御笠の森遺跡は御笠川西岸に広がる遺跡であり、区画溝を有する屋敷跡が確認される大規模な集落である。隣接する宝松遺跡でも区画溝を巡らす集落が確認されており、両遺跡は江戸時代前期日田街道沿いに移転する前の山田村の跡と考えられる。出土遺物としては茶臼や羽子板などが出土しており富裕層が居住していたことがうかがえ、『筑前国統風土記拾遺』からも周辺の筒井村・中村を含む大きな村であったことが分かる。

#### 江戸時代以降

江戸時代になると、明治22年に成立する大野村につながる村々が成立する。後原遺跡は御供田遺跡に隣接しており、主に江戸時代後期の集落・墳墓が確認されている。近世の白木原村本村と考えられる。また、日田街道沿いには雑餉隈遺跡がありNVOIC銘の入った肥前産磁器が出土することから、雑餉隈町にあたり、街道を行き交う人や物の動きを示している。



**福岡市**

1. 持田ヶ浦古墳群A群
2. 持田ヶ浦古墳群B群
3. 持田ヶ浦古墳群C群
4. 持田ヶ浦古墳群D群
5. 持田ヶ浦古墳群E群
6. 持田ヶ浦古墳群F群
7. 今里不動古墳
8. 壘ヶ浦古墳群
9. 影ヶ浦遺跡
10. 金隈遺跡群
11. 井相田B遺跡群
12. 井相田D遺跡群
13. 井相田C遺跡群
14. 支野A遺跡
15. 支野C遺跡
16. 南八幡遺跡群
17. 雄銅隈遺跡群

**大野城市**

18. 唐山古墳群

**19. 乙金北古墳群**

20. 唐山遺跡
21. 御陵古墳群
22. 御陵偏遺跡
23. 塚口遺跡
24. 御陵前ノ椽遺跡
25. 善一田遺跡・古墳群
26. 王城山遺跡・古墳群
27. 古野遺跡・古墳群
28. 原口遺跡・古墳群
29. 乙金東跡群
30. 此間古墳群
31. 松葉園遺跡
32. 森園遺跡
33. ヒケシマ遺跡
34. 中ノ寺尾遺跡
35. 花園遺跡
36. 薬師ノ森遺跡
37. 観山遺跡
38. 原門遺跡

**39. 糠子ヶ尾遺跡**

40. 糠子ヶ尾遺跡
41. 糠子ヶ尾古墳
42. 茶藪原古墳群
43. 雲原古墳
44. 金山遺跡
45. 茶藪原遺跡
46. 仲島遺跡
47. 仲島本町尺遺跡
48. 川原遺跡
49. 御笠の森遺跡
50. 村下遺跡
51. 宝松遺跡
52. 善銅隈遺跡
53. 石勺遺跡
54. 原ノ畑遺跡
55. 後原遺跡
56. 御供田遺跡
57. 塚橋遺跡
58. 園分田遺跡

**59. 古賀遺跡**

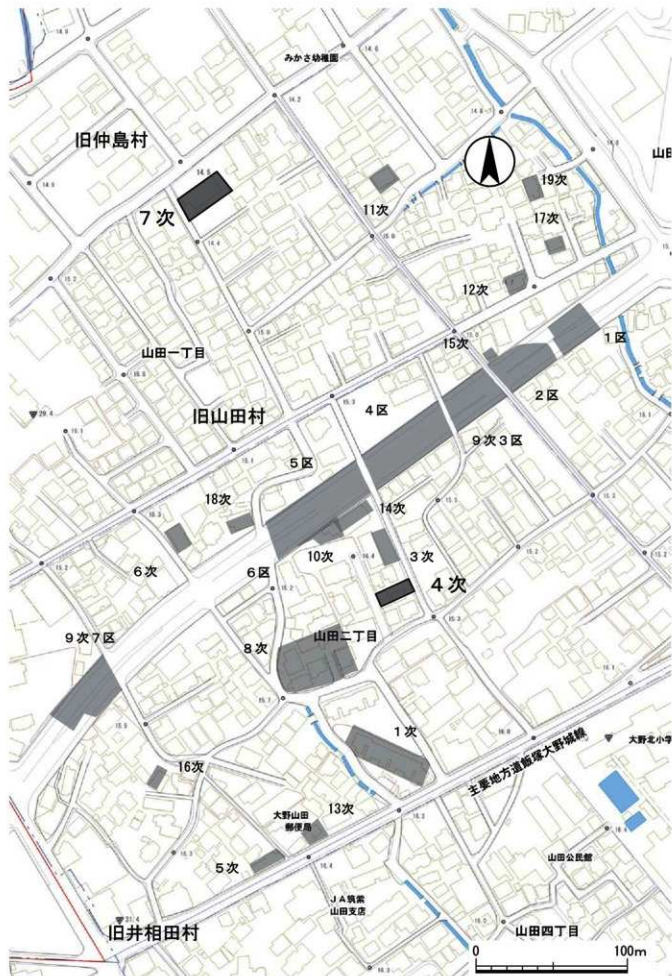
**太宰府市**

60. 成屋形遺跡群
61. 成屋形古墳群
62. 裏ノ田築跡
63. 裏ノ田古墳
64. 裏ノ田遺跡

**春日市**

65. 駿河A遺跡
66. 駿河B遺跡
67. 駿河D遺跡
68. 駿河E遺跡
69. 原ノ口遺跡
70. 先ノ原遺跡
71. 立石遺跡
72. 先ノ原春日公園内遺跡

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)



第2図 御笠の森遺跡と調査区の位置図 (S=1/2,500)

表1 御笠の森遺跡既往調査区一覧

名称	調査時名称	調査地番	調査期間	調査面積	内容	備考
御笠ノ森 欠 番	御笠ノ森遺跡	山田字妙蓮233	1988.4	552㎡	掘立柱建物跡3棟 (古代?)	県教委調査 県報88集
御笠の森遺跡 第3次調査	御笠の森遺跡	山田2丁目227-1	1989.9~10	300㎡	ビット・土坑多数 (平安・鎌倉)	大野城市文化財報告書 第103集
<b>御笠の森遺跡 第4次調査</b>	御笠の森遺跡	山田2丁目227-2	1990.6~7	529㎡	土坑(中世・近世)、 溝跡(江戸)	<b>本 報 告</b>
御笠の森遺跡 第5次調査	御笠の森遺跡	山田2丁目484・3・5	1991.4	238㎡	掘立柱建物跡1棟	大野城市文化財報告書 第103集
御笠の森遺跡 第6次調査	御笠の森遺跡	山田2丁目505-1・3	1993.11	150㎡	溝跡、土坑(中世?)	大野城市文化財報告書 第103集
<b>御笠の森遺跡 第7次調査</b>	御笠の森遺跡 第7次調査	山田1丁目520-1	1998.9~11	358㎡	溝跡(縄文・平安)、 土坑(古墳)	<b>本 報 告</b>
御笠の森遺跡 第8次調査	御笠の森遺跡 第8次調査	山田2丁目232・3	1994.4~ 2000.1	1767㎡	堅穴住居(奈良)、 土坑・ビット、溝跡 (江戸)	市 教 委 調 査・未 報 告
御笠の森遺跡 第9次調査	御笠の森遺跡 第9次調査	山田2・3丁目	2001.10~ 2004.2	5152㎡	掘立柱建物跡、井戸、 土坑、溝跡(弥生~江戸)	大野城市文化財報告書 第63・65集
御笠の森遺跡 第10次調査	御笠の森遺跡 第10次調査	山田2丁目228-1	2002.11~12	98㎡	掘立柱建物跡、井戸、 土坑(中世)	大野城市文化財報告書 第79集
御笠の森遺跡 第11次調査	御笠の森遺跡 第11次調査	山田2丁目173-5	2004.12~ 2005.1	70㎡	溝跡、土坑(古墳?)	大野城市文化財報告書 第134集
御笠の森遺跡 第12次調査	御笠の森遺跡 第12次調査	山田2丁目184- 14・16	2010.5~6	69㎡	溝跡、ビット(室町~江戸)	大野城市文化財報告書 第134集
御笠の森遺跡 第13次調査	御笠の森遺跡 第13次調査	山田2丁目495-1	2011.11.4~ 12.26	175.5㎡	土坑・ビット	大野城市文化財報告書 第134集
御笠の森遺跡 第14次調査	御笠の森遺跡 第14次調査	山田2丁目227-4 他	2013.9.7~ 2014.1.7	204㎡	溝跡(中世、近世)、 土坑・ビット他 (中世)	大野城市文化財報告書 第125集
御笠の森遺跡 第15次調査	御笠の森遺跡 第15次調査	山田3丁目201-17	2013.9.27~ 10.26	100㎡	井戸(中世)、土坑、 ビット	大野城市文化財報告書 第134集
御笠の森遺跡 第16次調査	御笠の森遺跡 第16次調査	山田2丁目561-5、 562-2の一部	2014.7~ 5.15	86㎡	溝跡、土坑他(中世)	大野城市文化財報告書 第134集
御笠の森遺跡 第17次調査	御笠の森遺跡 第17次調査	山田3丁目181-4	2014.9.17~ 10.8	67㎡	ビット(中世)	大野城市文化財報告書 第134集
御笠の森遺跡 第18次調査	御笠の森遺跡 第18次調査	山田2丁目504-2	2015.6.10~ 7.31	144㎡	溝跡、ビット(中世、 近世)	大野城市文化財報告書 第153集
御笠の森遺跡 第19次調査	御笠の森遺跡 第19次調査	山田3丁目180-4・5 178-3・5	2019.8.19~ 9.13	66㎡	土坑・ビット(古 代、中世)	大野城市文化財報告書 第185集

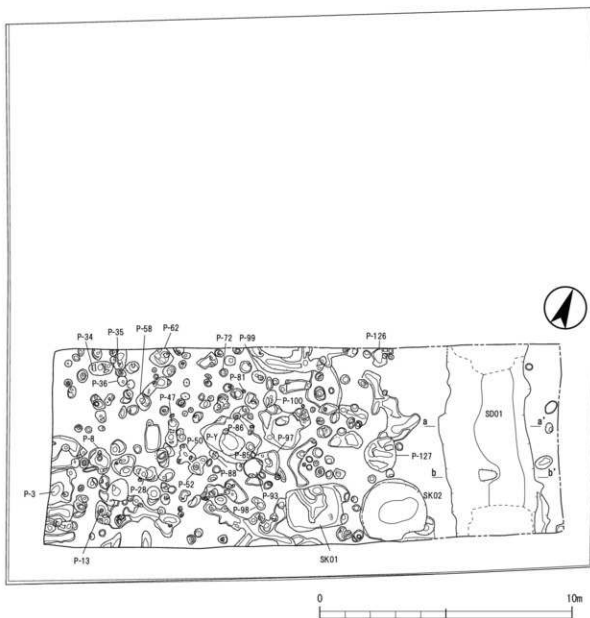
### Ⅲ. 調査の結果

#### 1. 第4次調査

##### (1) 調査概要 (第3図、図版1・2)

御笠の森遺跡第4次調査地は、大野城市山田2丁目227-2に所在する。共同住宅の建設が計画され、事業地のうち、ほぼ全面にあたる529m<sup>2</sup>について発掘調査を実施した。

発掘調査地は、福岡平野の平坦地にあたり、御笠川西岸の沖積平野上に位置する。調査は、平成2年6月21日～7月13日の間に実施した。調査の結果、大溝1条、土坑のほか、ピットが多数確認された。大溝は、北西から南東方向にのびており、第3次調査や第8次調査の結果から、一辺70m程度の方形に巡る区画溝であることが明らかになっている。大溝の内側には土坑・ピットが密集し、



第3図 御笠の森遺跡第4次調査遺構配置図 (S=1/150)

掘立柱建物が存在したと考えられるが復元することができなかった。

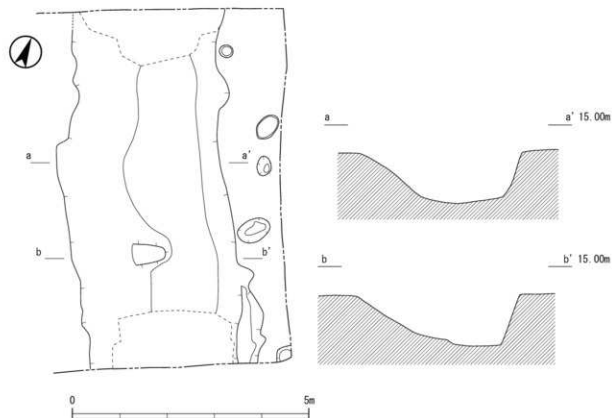
なお、調査回数について調査時は第2次調査として実施したが、調査時期と回数に過誤があり、今回の調査を第4次調査として報告を行う。

## (2) 遺構と遺物

### 1) 大溝

#### SD01 (第4図、図版3)

調査区東端に位置し、略北西-南東方向に主軸をとる大溝である。溝の幅は、調査区北壁沿いで3.26m、調査区南壁沿いで3.56m、溝の中央部で3.45mを測る。溝の最深部は南側部分で遺構検出面から105cmである。また溝の南半部西側壁面では遺構検出面から84~95cmの深さにスロープ状に23~45cm幅の段がみられる。溝底部は若干の凹凸はあるものの南北両端部でレベル差はみられないが、調査された範囲で全体的に東側から西側に4~10cmほど傾斜する。また東側の立ち上がりは傾斜が急で、西側はゆるく立ち上がる。出土遺物には、須恵器・土師器・弥生土器・陶磁器などがある。



第4図 第4次調査 SD01実測図 (S=1/80)



## 出土遺物（第5～7図、図版10）

### 須恵器

鉢（1） 底部平底。体部は大きく外方にひろく。体部内面はヨコ方向にカキメを施す。産地不明。

### 土師器

杯（2・3） 2は底部糸切り。やや深い杯部をもつ。3は底部は糸切りで小さく、体部は深く丸みを持つ。

小皿（4） 底部糸切り。杯部は浅く、見込みは外周を強くナデて中央が盛り上がる。

羽口（5） 細身であるが羽口とした。内面は明橙色で整形時の巻き上げ痕が残る。外面煤付着。

鍋（6） 底部は丸く、体部は大きく開いた後に内湾し、口縁部にいたる。内外面ハケメ。体部外面に煤が著しく付着する。

### 瓦質土器

蓋（7・8） いずれも肩部に菊のスタンプ文を施す。頸部は直立する。

火鉢（9～13） 9は口縁部外面に梅花のスタンプ文と櫛書き文を施す。山村AⅢ類。10は脚部の破片。内外面ヨコ方向のハケ目を施す。11は脚部の破片。鉢の底部外面にハケ目を施す。12は二条の突帯間に菱形の刺突文を施す。山村AⅢ類。13は樽状の体部をもつ。山村AⅢ類。

### 陶器

椀（14・15） 14は体部は丸く、透明釉をかける玉子手椀である。肥前産。17C第2～3四半期。15は体部は丸く、口縁部はわずかに外反し、内外面灰釉をかける。肥前産。17C前～中葉。

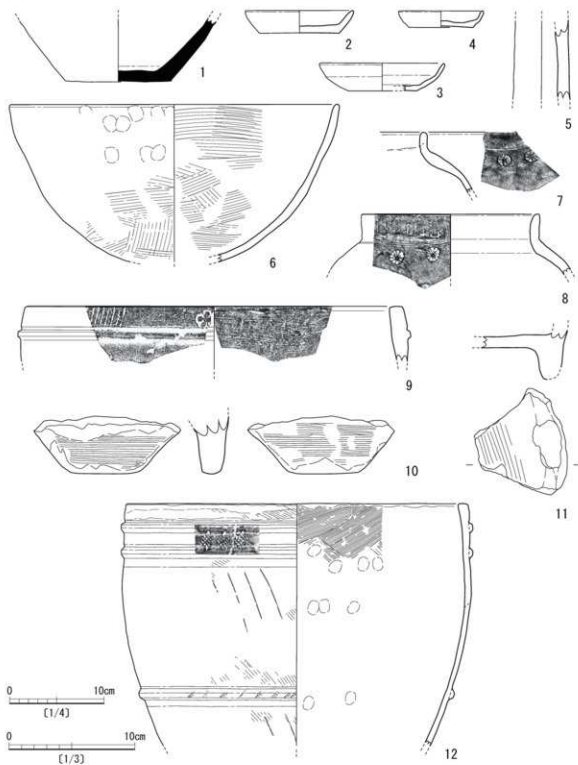
皿（16～20） 16は口縁は端反りになり、白化粧土の後に青釉をかける。肥前産。17C中葉。17は大皿。体部内面は白化粧土を施した後、銅緑釉、鉄釉で文様を描く二彩手である。体部外面下半は露胎。肥前産。17C後半。18は体部は緩やかに内湾し、口縁部は外反する。体部は白化粧土を波状に巡らせ、見込みには陶石を混ぜた目跡が残る。体部外面は口縁部より下半は露胎。肥前産。1630～50年代。19は銅緑色の釉をかけ、見込みは蛇の目釉剥ぎを施す。外面は透明釉。豊付から高台内面は露胎。高台内には兜巾と呼ばれる円錐形状に突出した削り残しが見られる。肥前嬉野内野山産。17C第4四半期～18C前。20は口縁部はわずかに外反し、体部は緩やかに内湾する。肥前産。17C代。

鉢（21～23） 21は片口がつく。体部内面は灰釉を全面にかけ、降灰が認められる。体部外面は露胎。肥前産。1590～1630年代。22は口縁部を玉縁状に作り、外面をくぼませる。無釉。筑前産か。23は片口がつく。口縁を玉縁状に外方に丸く作り出す。筑前上野・高取か。

壺（24） 器壁は薄く、ほぼ直立する体部からゆるやかに肩部にいたる。体部内面は鉄釉をかけ、外面は黄緑色を呈する釉をかける。中国産と思われるが、産地不明。

### 磁器

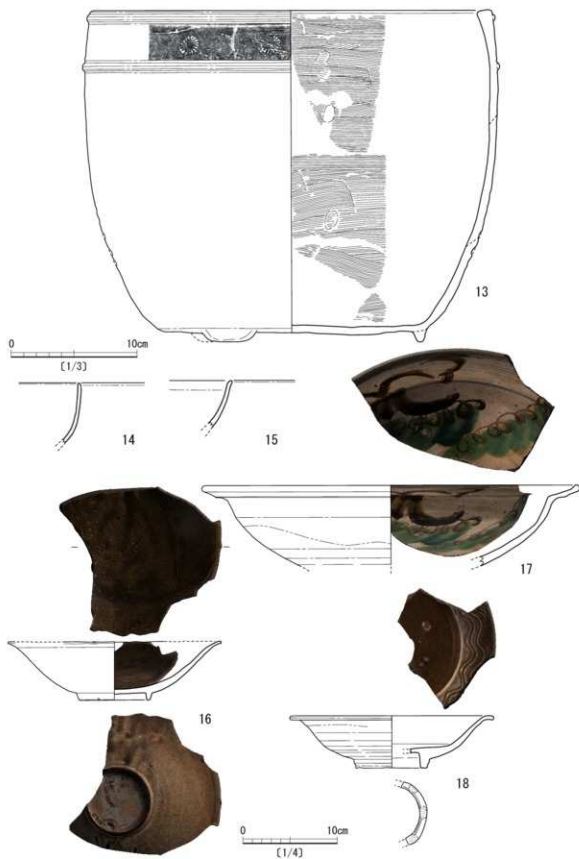
椀（25～31） 25は青磁椀。外面に幅の狭い剣先蓮弁文を施す。中国産。15C代。26は青磁。内面に如意頭文を陽刻する輪花椀である。肥前産。17C中葉。27は初期色絵。外面に赤・緑・紫・黄色で花卉を描く。肥前有田産か。1640～50年代。28は染付。外面に細い線で菊弁文を描く。肥前産。17C後半。29は染付の小椀。外面に網目文を施す。肥前産。17C中葉。30は染付。口縁部が大きく



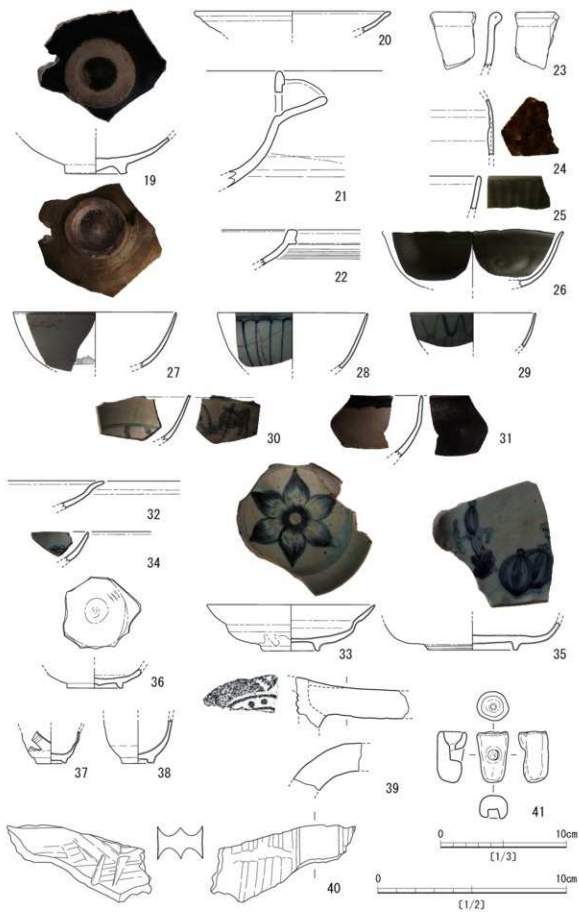
第5図 第4次調査 SD01出土遺物実測図① (12はS=1/4、その他はS=1/3)

外反するようである。外面は鹿が表現される。中国漳州窯産。31は天目碗。体部外面から口縁部内面まで黒色の釉、体部内面は灰釉とかけ分ける。肥前産。1630～40年代。

皿 (32～36) 32は青磁。口縁部は外反する。肥前産。1630～40年代。33は染付。見込みに6弁の花を描く。肥前産。1610～30年代。34は染付。内面に花文を描く。肥前産。1610～30年代。35は



第6図 第4次調査 SD01出土遺物実測図② (14・15はS=1/3、その他はS=1/4)



第7図 第4次調査 SD01出土遺物実測図③ (40はS=1/2、その他はS=1/3)

染付。見込みに瓜を描く。肥前産。1630～40年代。36は白磁小皿。見込みは軸を掻き取り露胎になる。中国産。福建あたりの製品の可能性が高い。

小杯(37・38) 37は白磁。外面に突線があり、文様のように見えるが小片のため不明。肥前産。1640～50年代。38は白磁。高台部に黒砂が付着する。肥前産。1630～40年代。

## 瓦

軒丸瓦(39) 瓦当面がほぼ欠失するが、外縁は斜めになるようで、内側に細かな珠文を巡らせる。老司式と考えられる。

## 石製品

石鍋(40) 縮状把手のつくもので、形状より木戸Ⅱ-a類にあたる。外面には煤が著しい。

## 土製品

煙管(41) 雁首の部分と考えられる。側面には羅字につながる円孔が認められる。火皿の部分には煤が付着する。

## 2) 土坑

### SK01(第8図)

調査区南壁近くのほぼ中央に位置する。SK02の西側約70cmに位置する。土坑の東壁は南北両側にピットが重複している。また、土坑の中央部は他遺構の重複により溝状に深くなり、土坑北壁に接して挿鉢状の底部を呈するピットがみられる。

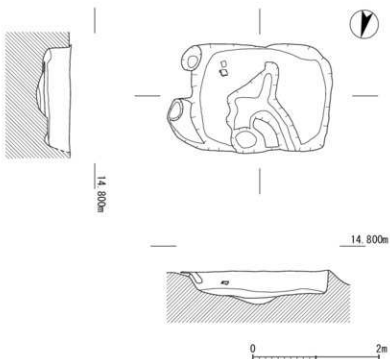
平面形は長軸が北東-南西方向の長方形を呈するが、北東隅はテラス状に段がつく。遺構の規模は、北東隅のテラス状部分を含めると長軸方向で2.66m、短軸方向で最大1.7mを測る。床面は、中央部の不整形に深くなる部分以外は、南壁に向かって若干高くなる。遺構検出面から床面までの深さは最大38cmである。本遺構中央部北壁に接するピットは遺構検出面から50cmの深さを測る。

出土遺物には、須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・焼土塊などがある。

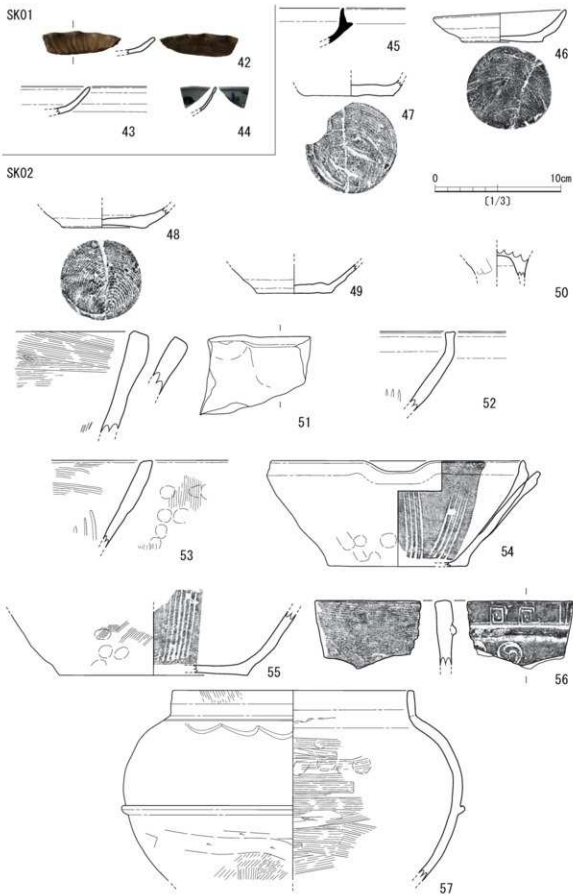
### 出土遺物(第9図)

#### 陶器

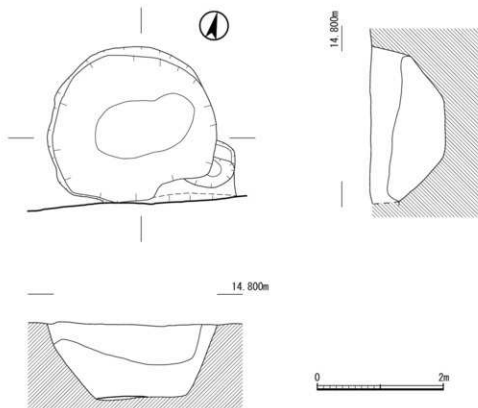
皿(42・43) 42は口縁を折縁にする輪花皿である。内外面灰軸をかける。瀬戸産。16C後半。43は小皿。体部中位から丸く口縁部にいたる。内外面とも灰軸がかかる。朝鮮半島産の灰青沙器。16C代。



第8図 第4次調査 SK01実測図 (S=1/60)



第9図 第4次調査 SK01・SK02出土遺物実測図 (S=1/3)



第10図 第4次調査 SK02実測図 (S=1/60)

#### 磁器

小皿 (44) 染付。口縁部だけの小片。外面は植物文、内面に花文を描く。景德鎮窯産。16C末～17C初。

#### SK02 (第10図、図版4)

調査区南壁に一部かかり、SK01の東側に位置する。遺構の南側が調査区外に一部かかるが、平面形は略円形を呈するものと推定される。遺構の規模は東西軸で27mを測り、南北方向で最大25mを測る。遺構の立ち上がりはややなだらかで、床面はほぼ平らであるが西側に向かって若干低くなる。遺構の深さは、遺構検出面から最大で124cmを測る。出土遺物には、須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・弥生土器・陶磁器・瓦・土製品・石製品などがある。

#### 出土遺物 (第9・11～14図、図版10・11)

##### 須恵器

杯身 (45) 口縁部はやや内傾して立ち上がり、受部は短い。小田編年ⅣA期。

##### 土師器

杯 (46～48) 46は全体に重み大きい。内外面回転ナデを施し、体部中位に屈曲をもつ。底部糸切り。底部内面に煤が付着する。47は底部のみの破片。底部糸切り。48は体部を失うが、残る破片から大きく開くようである。底部糸切り。体部内面に煤が付着し、底部内面は円形に灰色に変色する。灯明の痕跡であろうか？

小皿 (49) 底部が小さく、体部は大きく外方に開く。底部は調整痕が認められない。底部内面は

左回りの粘土卷上げ痕が残る。

**高杯 (50)** 磨減が著しく全形を明らかにできないが、一応高杯基部の破片と考えた。

#### 瓦質土器

**鉢 (51)** 体部は大きく開き、器壁は端部にむかって厚くバチ形を呈する。片口がつく。

**擂鉢 (52~55)** 52は大きく開く体部から屈曲して直立し、端部は面をなす。内外面とも煤が付着する。豊前系か。53は口縁部はほぼ水平で、播目は3本確認できる。山村AⅣ類。54は口縁部をつまみ上げるように丸く収め、片口がつく。須恵質に焼成される。山村AⅡ類。55は底部平底。内外面とも橙色を呈し、内面には7本一組の播り目を施す。

**火鉢 (56)** 56は雲雷文のようなスタンプと三つ巴文のスタンプを施す。山村AⅡ類か？

**釜 (57~59)** 57は須恵質に焼成される。最大径をやや上にとるようであり、体部中に低い山形の突帯を巡らせる。肩部に一本書きの波状文を巡らせる。山村BⅠb類。58は肩部に最大径をとり、体部中位よりやや下に低い台形状の突帯を巡らせる。口縁部下に弓状のスタンプ文を施す。肩部に把手の痕跡が残る。山村AⅡ類。59は肩部に2段にわたり梅花のスタンプ文を施す。体部中位の鐙は長く突出し、鐙の下面は被熱する。山村AⅡa類。

**蓋 (60)** 鍋や水指などに伴う蓋か。つまみは粘土紐を山形に貼り付け、天井部外面はカキメを施す。

**不明製品 (61)** 断面三角形を呈し、体部は内傾するようである。

#### 弥生土器

**甕 (62)** 口縁部のみ破片。口縁部は大きく外反する。内外面とも磨減する。

#### 陶器

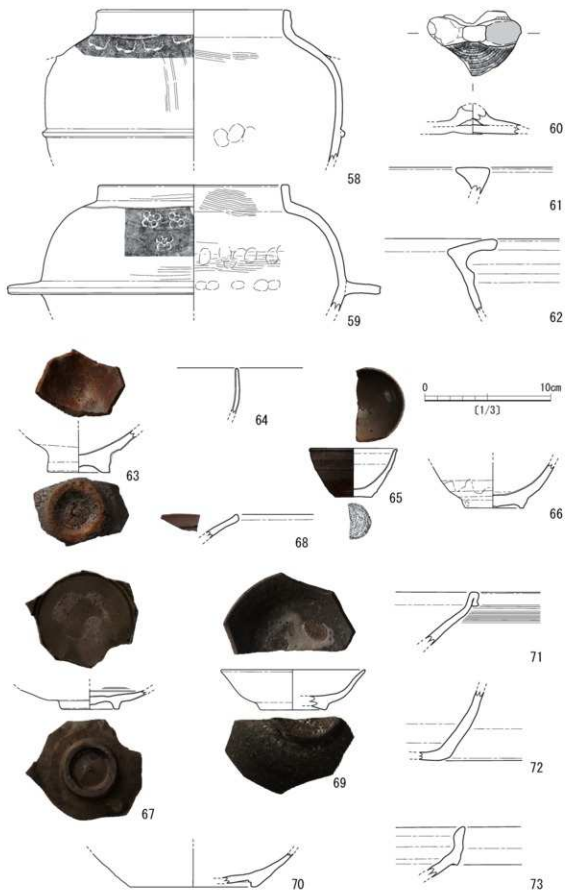
**椀 (63~66)** 63は井戸茶碗。全面施釉され、畳付のみ軸を掻き取る。見込みに砂目が認められる。16C代。64は兵器手椀か。黄白色の釉に細かな貫入が入る。肥前産。17C後半頃。65は小杯。灰釉がかかる。底部は糸切り。体部外面から底部は露胎で、胎土目の焼けムラが認められる。肥前産。1590~1610年代。66は外面中位まで灰釉がかかり、高台内は兜巾が認められる。肥前産。1590~1610年代。

**皿 (67~69)** 67は見込みに二条の鉄絵を描き、見込みに砂目を有する。肥前三川内窯産か。1610~30年代。68は大皿の可能性が高い。内面に一条鉄軸で線が描かれる。肥前産。1590~1610年代。69は高台は上げ底、見込みに砂目が残り、焼成不良のため釉が白く発色する。朝鮮半島産灰青沙器。

**鉢 (70~72)** 70は萁筒底となり、内外面無釉である。太宰府分類Ⅵ類か？71は端部を外方に折り返して四角く玉縁状に作る。産地・時期不明。72は底部平底。外面は褐色。内面は灰色に焼成される。産地・時期不明。

**擂鉢 (73~76)** 73は口縁部は幅広の帯状を呈し、やや内傾する。須恵質に焼成される。備前産播鉢Ⅳ~Ⅵ期。74は底部平底。体部は大きく開き、内傾する幅広の帯状口縁部をつける。内面は10本一組の播り目を施し、上半は一部使用により消失する。備前産播鉢Ⅳ~Ⅵ期。75は口縁部は幅広の帯状を呈し、やや内傾する。備前産播鉢Ⅳ~Ⅵ期。76は口縁部内外面に鉄軸がかけられる。肥前





第11图 第4次調査 SK02出土遺物実測図① (S=1/3)

産。17C前半頃。

**壺 (77~79)** 77は体部の小片。内面は施軸、外面は露胎になる。長胴のものか。産地等は不明。78は口縁部は玉縁状に肥厚し、鉄軸を施す。肥前産。17C前半の可能性。79は底部の小片。胎土は灰色で、褐軸がかかる。中国産。13~14C頃。

#### 磁器

**椀 (80~89)** 80は染付。口縁部のみ的小片である。外面は花文?を描く。中国景德鎮窯産。81は白磁椀。内面に草花文を施す。太宰府分類Ⅶ-b類。82は白磁椀。破断が著しい。太宰府分類Ⅴ類。83は白磁椀。口縁部のみ的小片。太宰府分類Ⅳ類。84は染付。体部外面に花鳥文を描く。見込みには花文も描く。高台内側は透明釉をかけ、体部内外面は青味がかった釉をかけ分ける。レンジャー椀。中国景德鎮窯産。16C前~中葉。136と同一個体。85は染付小椀。体部は丸く、豊付には砂が付着する。外面は網目文を施す。肥前産。1640~60年代。86は玉子手椀。体部外面にロクロ目を残し、一部釉が泡立つことから火災に遭った可能性がある。肥前産。1610~17C中葉。87は口縁部は端反りで、器壁は厚い。外面には貫入が認められる。中国産か。88は高台径が小さく、内面は露胎になる。見込みに分銅形を描き、「金」「玉」「満」「堂」の文字が認められる。中国龍泉窯系。15C代。89は青磁。軸は白濁しており、焼成不良。中国福建・広東周辺の窯の産か。14C末~15C。

**皿 (90~98)** 90は染付小皿。底部は碁筒底で、豊付は蛇の目状に軸を掻き取り、窯砂が付着する。見込みには水草を描く。中国産。16C前~中葉。91は白磁。内外面とも施軸され、口縁部は端反りとなる。中国景德鎮窯産。16C代。92は白磁。内外面とも施軸され、釉はやや黄色味を帯びる。口縁部は端反りとなる。中国景德鎮窯産。16C代。93は脚付の青磁角皿。ロクロ整形後、型打ち成形し、見込みの四周を片彫りで画し、内側に花文を描く。脚は型押し成形、貼り付け位置より三脚になると考えられる。肥前波佐見産。1630~40年代。94は染付。体部は丸く口縁にむかってやや開き、高台は小さく、砂目が付着する。見込みに流水と草と花を描く。肥前産。17C前半。95は染付。型打ち成形で、体部は丸く口縁部はやや開く。高台には砂が付着する。見込みには布目が残り、草文と花文を描く。肥前産。17C中葉。96は染付。碁筒底でもみがら状の目跡がつく。外面は二条の圏線の間に文様を描く。見込みには圏線の内側に人形寿字文を描く。中国漳州窯産か。16C後半。97は白磁。口径20cm以上になる。見込みに降灰が認められる。外面は貫入が著しく、中位に指跡が認められる。肥前産。1630~50年代。98は染付小皿。外面は鋸歯状の蓮弁を描き、内面に圏線を一条巡らせる。中国漳州窯産か。16C後半~17C初頭。

#### 瓦

**平瓦 (99)** 小片で内外面とも磨減が著しい。凸面は網目叩きの痕跡が残るが、凹面は調整不明。

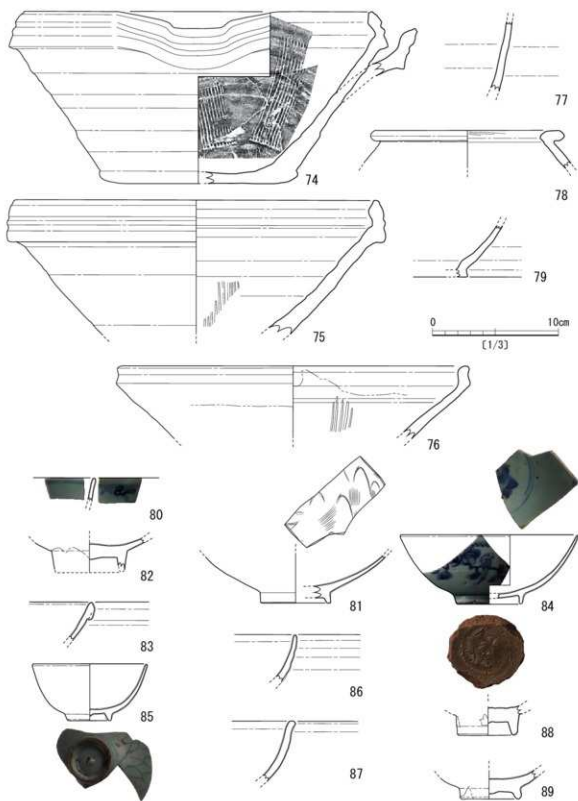
#### 鉄器

**針 (100・101)** いずれも針と考えた。100は針の耳が一部残る。101は片側欠失しており、100よりやや長い。

**棒状鉄素材 (102)** 幅広の身部に方頭の端部をもつ。折り返しは確認できない。

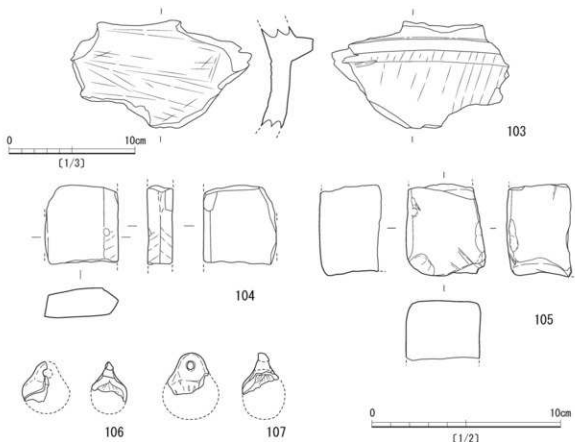
#### 石製品

**石鍋 (103)** 体部のみを残欠である。外面は鐙が巡り、鐙の下半は煤が付着する。器表面には小



第12図 第4次調査 SK02出土遺物実測図② (S=1/3)





第14図 第4次調査 SK02出土遺物実測図④ (103はS=1/3、その他はS=1/2)

小さな穴が著しく、石材としては良質ではない。滑石製。木戸Ⅲ-a類。

**砥石 (104・105)** 104の上面は内側に向かってやや凹み、側面は面取りされる。105は大型のもの。砥面は三面確認できる。

#### 土製品

**土鈴 (106・107)** 106はつまみから体部上半の破片。つまみは高く細い。内面にシボリ痕が残る。

107はつまみから体部上半の破片。つまみは太く丸い。内面にシボリ痕が残る。

### 3) ビット

#### P-3出土遺物 (第15図)

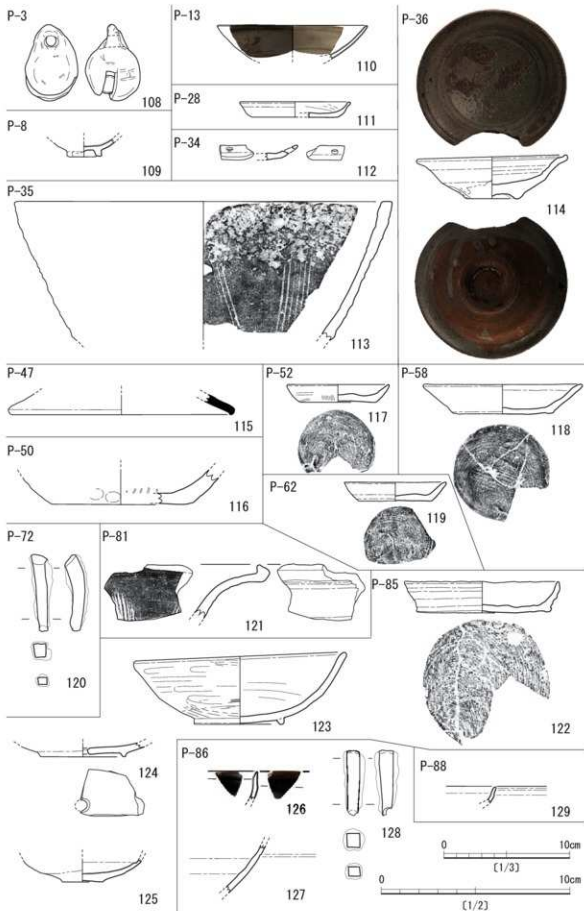
#### 土製品

**土鈴 (108)** 橙色を呈し、完形品である。玉も内部に残っており、振ると音がする。外面に整形時のシワが残る。

#### P-8出土遺物 (第15図)

#### 磁器

**小杯 (109)** 白磁。壺付から高台内部は露胎。高台内部に円錐形状の削り残しが残る。肥前産。



第15図 第4次調査 ビット出土遺物実測図 (108・120・128はS=1/2、その他はS=1/3)

**P-13出土遺物 (第15図)**

**磁器**

皿(110) 染付。体部外面下端の一部が露胎、碁笥底になると考える。中国漳州窯産。16C後半。

**P-28出土遺物 (第15図)**

**土師器**

小皿(111) 糸切り。内面は全面黒く煤がつく。太宰府編年XⅧ期以降。

**P-34出土遺物 (第15図)**

**土師器**

杯(112) 口縁部下に焼成前に凹孔を外面から穿つ。

**P-35出土遺物 (第15図)**

**瓦質土器**

播鉢(113) 器壁が内外面とも大きく荒れるが、播目が消えるほど使い込まれ、滑らかである。

**P-36出土遺物 (第15図、図版11)**

**陶器**

皿(114) 薄緑皿。見込みに砂目が残る。高台は露胎で、目跡が残る。肥前産。1610~1630年代。

**P-47出土遺物 (第15図)**

**須恵器**

杯蓋(115) 口縁部だけの小片。体部外面に重ね焼きの痕跡が残り、内面に煤が付着する。

**P-50出土遺物 (第15図)**

**瓦質土器**

播鉢(116) 平底で、体部内面の播目はほとんど播り消されている。

**P-52出土遺物 (第15図、図版11)**

**土師器**

小皿(117) 糸切り。底部内面は周囲を強くナデ、中央を盛り上げている。太宰府編年XⅧ~XⅨ期。

**P-58出土遺物 (第15図、図版11)**

**土師器**

杯(118) 糸切り。体部は外方へ大きく開き、内面は煤が付着する。太宰府分類XⅧ期。

**P-62出土遺物 (第15図、図版11)**

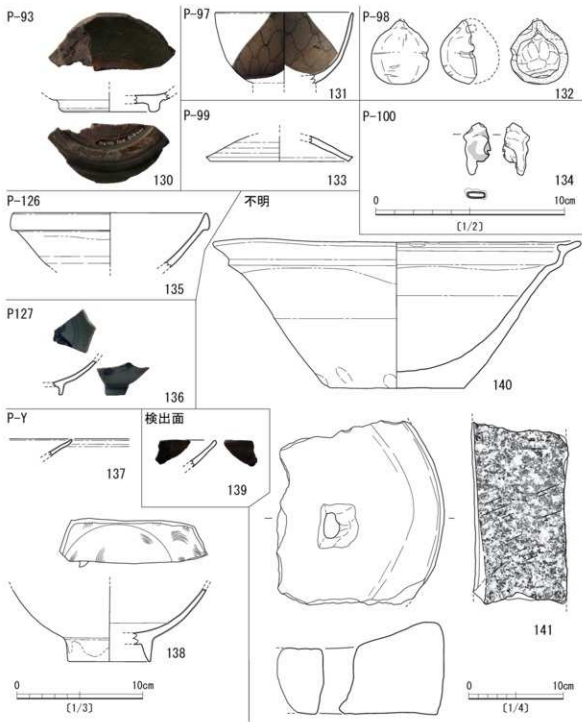
**土師器**

小皿(119) 糸切り。底部内面は周囲を強くナデ、中央を盛り上げている。内面に煤が付着する。太宰府編年XⅧ~XⅨ期。

**P-72出土遺物 (第15図)**

**鉄器**

釘(120) 釘とした。先端部は欠失するが、先端部に向かって次第に細くなる。



第16図 第4次調査 ビットおよびその他の出土遺物実測図  
(132・134はS=1/2、141はS=1/4、その他はS=1/3)

P-81出土遺物 (第15図)

陶器

擂鉢 (121) 口縁部は大きく外反し、二重口縁風になる。口縁部内外面に鉄軸を施す。肥前産。  
17C前半。



**P-85出土遺物 (第15図、図版11・12)**

**土師器**

**杯 (122)** 糸切り。ロクロで成形されるが、粗雑でいびつになる。法量では太宰府分類XⅧ期以降。

**瓦器**

**椀 (123・124)** 123は高台は断面台形で低く、径は広い。内外面とも丁寧な手持ちヘラ磨きによって仕上げられる。中島分類Ⅱ-1類。124は高台は断面台形で低い。内面は丁寧な手持ちヘラ磨きが施される。椀の底部中央には円孔が穿たれる。

**磁器**

**皿 (125)** 白磁。底部は小さく、糸切り後ナデで仕上げる。体部上位で内湾し、屈曲部内面に段を有する。太宰府分類Ⅵ-1-b類。

**P-86出土遺物 (第15図)**

**陶器**

**椀 (126)** 天目椀。口縁部は褐色釉、内外面は黒色釉を施す。中国建窯産。14~15C。

**磁器**

**壺 (127)** 青磁。体部の破片。外面は一条の沈線を巡らせる。越州窯系か？

**鉄器**

**釘 (128)** 先端部は欠失する。断面四角形を呈する。

**P-88出土遺物 (第15図)**

**磁器**

**小皿 (129)** 白磁。中国産。14C前半の可能性ある。

**P-93出土遺物 (第16図)**

**磁器**

**椀 (130)** 青磁。高台内面と見込みの中央は釉を掻き取る。龍泉窯産。14C後半~15C前半。

**P-97出土遺物 (第16図)**

**磁器**

**椀 (131)** 染付。内外面に網目文を描く。肥前産。17C前~中葉。

**P-98出土遺物 (第16図)**

**土製品**

**土鈴 (132)** 土鈴の半身が残る。内面にはつまみ成形時の絞り目が見える。

**P-99出土遺物 (第16図)**

**土製品**

**蓋 (133)** 水指の蓋であろうか。内外面とも自然釉がかかる。肥前産。1590~1630年代。

**P-100出土遺物 (第16図)**

**金属製品**

**不明製品 (134)** 青銅製の不明製品。鋤先状になり、袋状の内面には木質が残る。用途等不明。

#### P-126出土遺物 (第16図)

##### 磁器

椀 (135) 白磁。玉縁状の口縁部を有し、体部外面は露胎になる。灰白色の釉を施した後、灰黄色の釉を体部内面から口縁部に施す。太宰府分類Ⅳ類。

#### P-127出土遺物 (第16図)

##### 磁器

椀 (136) 染付。外面と見込みに文様を描く。84と同一個体。中国産。レンツウ椀。

#### P-Y出土遺物 (第16図)

##### 陶器

皿 (137) 口縁部が内湾して立ち上がるため、一応皿とする。中国産であろうか。13~14C代。

##### 磁器

椀 (138) 白磁。高台は細く高く、露胎になる。太宰府分類Ⅴ類。

#### 遺構検出面出土遺物 (第16図)

##### 陶器

皿 (139) 黒色の釉をかけ、鉄絵を描く。肥前産。1590~1610年代。

#### 4) その他

ラベルの封入がなかったため、出土遺構は不明であるが、資料の状態が良いことから資料化を行い、以下のとおり報告しておく。

#### 出土遺物 (第16図、図版12)

##### 陶器

播鉢 (140) 底部は糸切り、平底になる。体部は大きく開き、口縁部は二重口縁風に立ち上がり、内外面に突出させる。口縁部内外面のみ鉄軸を施し、端部には目跡が残る。肥前系。

##### 石製品

石臼 (141) 上臼の残欠である。もの入れの孔は雑に穿たれる。播目は完全に無くなっている。

#### (3) 小結

ここで第4次調査の遺構と遺物についてまとめておく。出土遺物としては、弥生時代のものから江戸時代のものまで認められる。

SD01については、出土状況の記録がなくどの層から出土したのかは分からないが、出土遺物の年代の下限は17世紀後半にあたる。また、破砕され細片化した奈良時代の軒丸瓦や14~16世紀の遺物が含まれ、それらの時期の遺構が周辺に存在したものと考えられる。

SK01は瀬戸産陶器皿より16世紀後半ごろと考えられる。SK02も出土遺物の時期幅が広いが、肥前系染付の年代より、17世紀前半の年代を考えておきたい。

その他の遺構では、P-85・126は11世紀後半~12世紀前半、P-52・58は13世紀後半、P-13が15世紀後半~16世紀後半、P-35は16世紀後半、P-36・97は17世紀前半と考えられる。

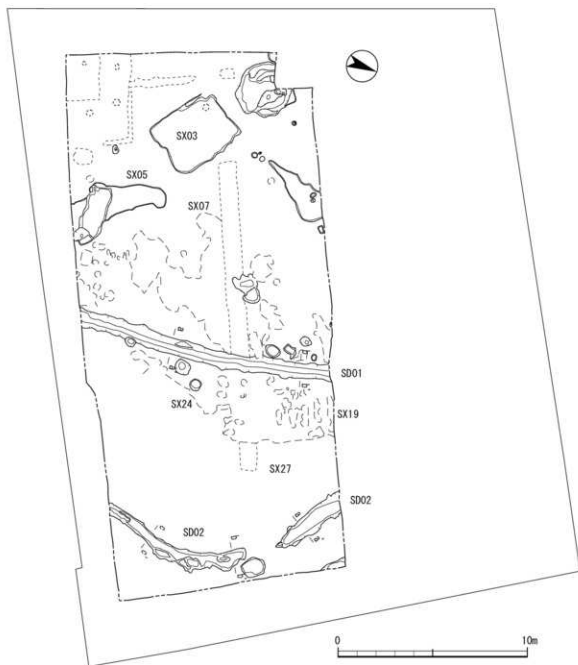
## 2. 第7次調査

### (1) 調査概要 (第17図、図版5)

御笠の森遺跡第7次調査地は、大野城市山田1丁目520-1に所在する。共同住宅の建設が計画され、事業地831㎡のうち、358㎡について発掘調査を実施した。

発掘調査地は、福岡平野の平坦地にあたり、御笠川西岸の沖積平野上に位置する。調査は、平成10年9月14日～11月6日の間に実施した。調査の結果、地表下128～197cm程度で遺構面が検出され、溝2条や土坑、ピット、風倒木痕などが確認された。

調査地の遺構検出面は、西側が44～69cm高く、御笠川のある東側に向かって下がっている。ま



第17図 御笠の森遺跡第7次調査遺構配置図 (S=1/200)

た、SD01・02の埋土は非常に粘性が高く、一時滞水していたと考えられる。さらに、SX05などSD01周辺で確認した不整形土坑は、検出時に範囲を確認できたが、いずれも浅い。遺構として掘り込まれたものではなく、性格については不明である。

なお、調査回数について調査時は御笠の森遺跡第7次調査として実施した。平成16年3月に刊行された『御笠の森遺跡Ⅰ』では、調査地の位置より、隣接する川原遺跡として取り扱う旨を調査一覧に記載しており、以後もそれを踏襲していたが、第7次調査地は両遺跡に挟まれた位置にあり、川原遺跡としても調査時期と次数の整合はとれないことから、調査時の名称を採用し、今回の調査を御笠の森遺跡第7次調査として報告を行う。

## (2) 遺構と遺物

### 1) 溝

#### SD01 (第18図、図版6・7)

調査区中央部を北北東-南南東方向に縦断する。溝の幅は南部分(a-a')の上面で80cm、北部分(b-b')で76cmを測る。溝底部のレベル差は南北両端部ではやや北側が低くなるが、最も深くなるのは溝中央部である。溝の深さは、溝中央部分で遺構検出面から最大49cmを測る。出土遺物には土師器があり、いずれも小片であった。

#### 出土遺物 (第19図、図版12)

##### 土師器

椀(142) 高台部の小片である。体部は失われており全形は分からない。高台は直立に近い。

高杯(143) 短脚のもので、基部からハの字に大きく広がる。残存部から四方に円孔が穿たれる。

甕(144) 底部のみの破片。丸底で外面に煤が付着する。内面はハケメが残る。

##### 弥生土器

器台(145) 脚部は大きく開く。器壁は薄く華奢な印象を受ける。内面にシボリ痕が残る。

#### SD02 (第20図、図版8)

調査区東端に位置し、やや東へ湾曲して張り出すような形をなし、溝のほぼ中央部で一旦途切れる。溝の幅は、北部分(a-a')で92cm、陸橋部南側(b-b')で82cm、南部分(c-c')で50cmを測る。また、調査区北端部で112cm、南端部で60cmを測る。溝の最深部は南側部分で遺構検出面から20cm、陸橋部の北側はほぼ中央部分で遺構検出面から31cmの深さを測る。陸橋部より南の溝底部は、最も南側の一段深くなる部分以外はほぼ平坦である。この南側の一段深くなる部分はこれらの底面から5~10cmほど深くなる。陸橋から北側部分も溝底部のレベル差は、断面a-a'部で最も深くなるが、南端と北端部ではほぼレベル差がみられない。出土遺物には、縄文土器と石器があり、いずれも小片であった。

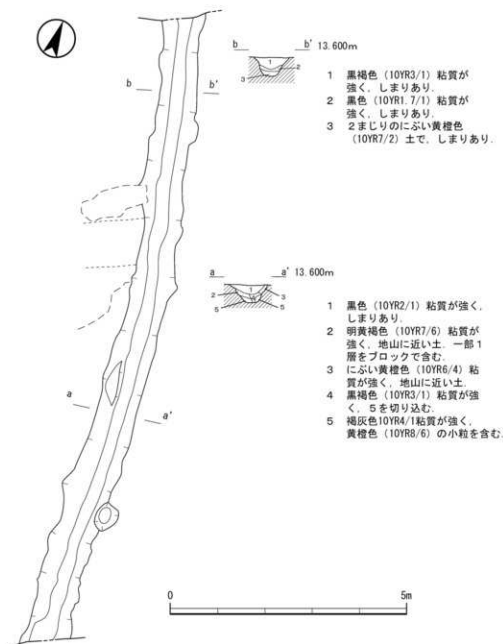
#### 出土遺物 (第19図)

##### 縄文土器

甕(146) 口縁部は断面三角の突帯を貼り付け、細かい刻みを施す。内外面磨滅している。

##### 石製品

石鏃(147) 黒曜石製。基部の抉りは深い。先端を欠損する。

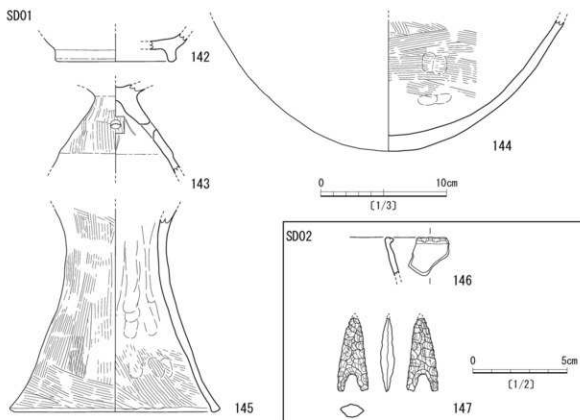


第18図 第7次調査 SD01実測図 (S=1/80)

## 2) 土坑

### SX03 (第21図、図版9)

調査区の西側壁近くに位置する。北西—南東方向に長軸をとる長方形プランの遺構である。遺構の西隅は輪郭がやや不明瞭であるが、遺構南西側壁中央部までテラス状に段をなす。遺構規模は長軸方向で最大4.0m、短軸方向で最大3.3mを測る。遺構南西側壁に沿うテラス状の段は長軸方向で1.64m、幅20cmの平坦面をなす。遺構の深さは、遺構検出面から最大で10cmで、床面は遺構の北西側部分で凹凸が顕著にみられる。他の部分は長軸方向ではほぼ平坦であるが、テラス状の段のある西南壁に向かってなだらかに低くなる。



第19図 第7次調査 SD01・SD02出土遺物実測図 (147はS=1/2、その他はS=1/3)

土坑の中央部では、床面直上から土師器が出土した。出土状況から、いくつかの群に分かれるが、完形品が多いということはなく、いずれも細片であった。

#### 出土遺物 (第22図、図版12)

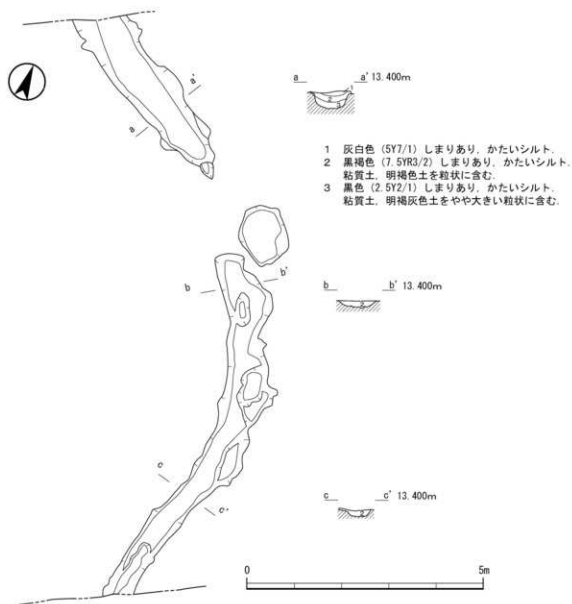
##### 土師器

**椀 (148~153)** 148・149は口縁部から体部が残存する。148は口縁部がやや内傾し、端部を丸くおさめる。149は口縁部ほぼ直立する。150・151・152・153は底部のみの破片。いずれも内面には押し出したような指頭痕が残る。150は外面やや尖り気味で、丸く仕上げる。151は底部はやや平底に近く、体部は剥離する。152は体部は直立気味に立ち上がる。153は底部は丸く、体部は弾けたように剥離する。

**小型丸底壺 (154・155)** 154は口縁部は外方に開く。内面は頸部までヘラ削り。155は体部内面はナデで仕上げ、器壁は薄い。

**高杯 (156~160)** 156・157は杯部の破片。いずれも口縁部は大きく開き、体部外面に明確な段を有する。158~160は脚部の破片。158・159は細い柱状脚部から大きく開く。160は脚端部に向かって大きく開く。

**甕 (161~163)** 161は口縁部は外方に開き、端部は丸く収める。外面左上がりの細かいハケメ、内面は左上がりのナデを施し、ケズリの痕跡は認められない。162は頸部はやや長く、口縁部に向かって大きく開く。外面は左上がりのハケメを施し、肩部に煤が付着する。内面右から左方向に一



第20図 第7次調査 SD02実測図 (S=1/80)

部頸部まで及ぶケズリを施す。163は口縁部は外方に開き、外面は丁寧にナデを施すが一部ハケメが残る。内面は右から左方向へのケズリを施すが、頸部までは及ばない。

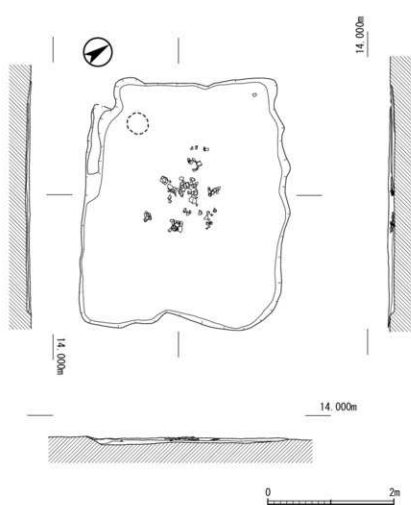
#### SX05 (第17図)

調査区の南壁で確認された。埋土は褐灰色粘質土で、浅く、底面の凹凸は著しい。水田もしくは包含層の一部と考えられ、遺構としては認識できない。出土遺物には須恵器・土師器・黒色土器・磁器がある。

#### 出土遺物 (第23図)

##### 須恵器

杯身 (164) 底部は平らで体部との境に低い台形状の高台がつく。杯部は浅い。



第21図 第7次調査 SX03実測図 (S=1/60)

#### 磁器

皿 (165・166) 165は白磁。口縁部は外方に開き、体部内面中位に沈線を巡らせる。166は同安室系青磁皿。太宰府分類I-1b類。内面施軸。ヘラ書き文と柳点描文を施す。

#### SX07・19・24・27 (第17図)

SD01の周辺で、遺構検出時に黒色土の落ち込みが認められたものである。楕円形・円形など様々な平面形を呈するが、深さは10cm以内で、明確な掘り込みが認められなかった。遺構検出面が緩く、凹凸が著しいため、足跡や水が溢れたりしたものがそのまま残ったものであろうか。出土遺物は須恵器・土師器・

弥生土器・陶器・石器などが出土した。

#### SX07出土遺物 (第23図)

##### 土師器

甕 (167・168) いずれも小片。口縁部は大きく開く。

##### 瓦質土器

鍋 (169) 口縁部は四角い玉縁状を呈する。内外面煤が付着する。

#### SX19出土遺物 (第23図)

##### 縄文土器

甕 (170) 口縁部にやや高い断面三角の突帯を貼り付け、細かい刻みを施す。内外面磨減。

#### SX24出土遺物 (第23図、図版12)

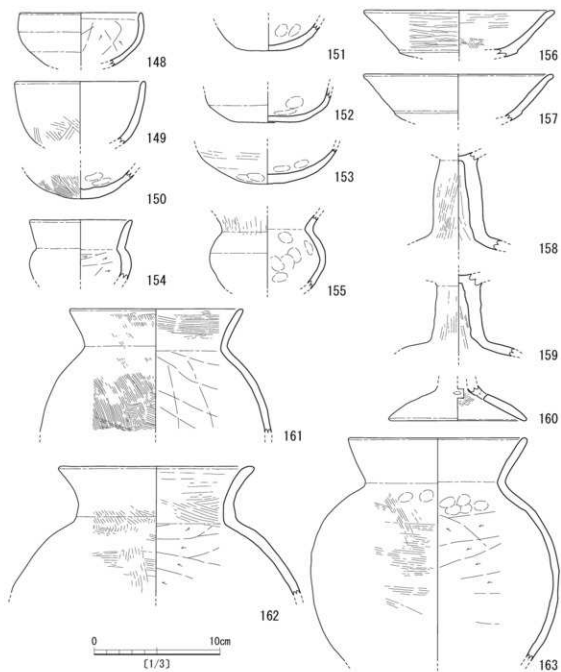
##### 須恵器

杯身 (171) 底部平底で、体部との境よりやや内側に低い断面台形の高台を貼り付ける。

#### SX27出土遺物 (第23図)

##### 陶器





第22図 第7次調査 SX03出土遺物実測図 (S=1/3)

壺 (172) 四角い丁字型の口縁部を有し、濃緑色の釉薬を施した後、口縁上面に白色釉を施す。

石製品

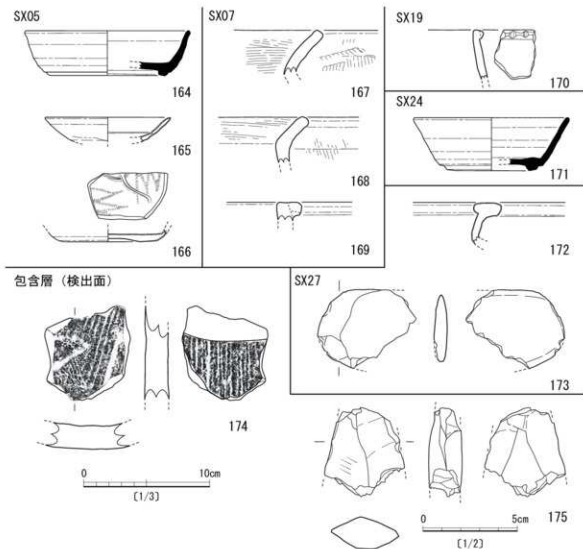
石磨丁 (173) 本来は長方形に近い形であったと考えられる。凝灰岩製。立岩産か？

### 3) その他の出土遺物

いずれも検出面からの出土遺物である。

瓦

平瓦 (174) 凸面に縄目叩き、凹面に布目・模骨痕が残る。橙色を呈し、焼成はあまい。



第23図 第7次調査 SX05・07・19・24・27およびその他の出土遺物実測図  
(173・175はS=1/2、その他はS=1/3)

### 石製品

不明 (175) 両面とも鑿を有し、剣形になるかとも考えるが用途不明である。チャート製。

### (3) 小結

ここで第7次調査の遺構と遺物についてまとめておく。出土遺物としては、縄文時代のものから近世のものまで認められる。

SD01は、土師器椀が最も新しい遺物であるが、小片のため時期は決めがたい。高台はそれほど高くないことから中島分類の土師器椀Ⅲ形式と考えられ11世紀末から12世紀初めごろであろうか。SD02は縄文土器と石器の出土があり、小片ではあるが縄文時代晩期終末としておく。SX03は祭祀土坑と考えることができ、柳田編年Ⅱc～Ⅲa期で4世紀中頃～後半頃の年代を考えておきたい。

最後に、遺構とは考えられなかったが、SX05などは太宰府編年D期(12世紀中頃～後半)の遺物から近世のものまでを含み、水田耕作を中心に土地利用が行われたと考えられる。

表2 御笠の森遺跡第4次調査出土土物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	流量 (cm・g) ①口徑②器高③底径④高台径⑤最大径⑥(底元径) (残存数)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	灰土器	鉢	SD01	② (48) ③ (84)	外面ナデ 内面カキメ、底面ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内25Y7/1 灰白色 外25Y7/1 灰白色-25Y6/1 黄灰色	
2	土師器	杯	SD01	① (86) ②1.8 ③ (63)	外面回転ナデ、外底面糸切り 内面回転ナデ、内底面ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内7.5YR7/3 に近い黄褐色	底部に粘土付着
3	土師器	杯	SD01	① (100) ②22 ③ (5.4)	内外面回転ナデ、外底面糸切り	A:微細な白色砂粒をわずかに含む B:良好 C:内10YR7/2 に近い黄褐色 外10YR7/3 に近い黄褐色	
4	土師器	小皿	SD01	① (68) ②1.3 ③ (5.0)	外面回転ナデ、外底面糸切り 内面回転ナデ、内底面ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR8/4 淡黄褐色	
5	土師器	皿口	SD01	② (63) ③ (45)	外面ナデ 内面ナデ・巻き上げ肌有	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内10R6/4 に近い赤褐色 外10YR8/4 淡黄褐色	外面一部彫付着
6	土師器	鍋	SD01	① (26.2) ② (12.45)	内面ハケメ後一部ナデ 外面体部中位指オサエナデ 体部下ハケメ	A:5mm 程度の長石・角閃石・雲母、微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内5YR6/6 褐色 外5YR5/4 に近い赤褐色-5YR17.1 黒色	器面外面に彫付着
7	瓦質土器	釜	SD01	② (48)	外面縦方向ハケ後ヨコナデ、スタンプ文 内面ナデ	A:1.5mm 以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内2.5Y5/1 黄灰色 外2.5Y5/1 黄灰色-2.5Y7/2 黄褐色	
8	瓦質土器	釜	SD01	① (142) ② (43)	外面縦方向ハケ後ヨコナデ、スタンプ文 内面ナデ	A:1mm 以下の白色砂粒を少量含む B:良好 C:内2.5Y7/3 黄褐色 外2.5Y6/1 黄灰色	
9	瓦質土器	火鉢	SD01	① (30.0) ② (43)	外面ナデ、スタンプ文・くし積み刺突文 内面ハケメ	A:2mm 以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内2.5Y5/1 灰白色 外2.5Y7/1 灰白色	
10	瓦質土器	火鉢	SD01	② (4.45)	内外面ハケメ 側面・底面ナデ	A:微細な白色砂粒を多く含む B:良好 C:内N4/ 灰白色	脚部の破片
11	瓦質土器	火鉢	SD01	② (3.9)	底部外面ハケメ 他はナデ	A:1.5mm 以下の白色砂粒・石英・雲母を多く含む B:良好 C:内2.5Y7/2 灰白色 外2.5Y7/2 黄褐色・N4/1 灰白色	脚部片
12	瓦質土器	火鉢	SD01	① (36.2) ② (25.6) ③ (37.0)	外面ハケメ、ミガキ 内面指オサエ、ハケメ後ナデ、指オサエ 口縁部に2条、脚部下に1条の突帯 口縁部突帯間に菱形刺突文が通る	A:微細な白色砂粒を少量と雲母を含む B:良好 C:内7.5YR6/3 に近い赤褐色-10YR5/1 黄褐色 外10YR4/1 褐色	
13	瓦質土器	火鉢	SD01	① (42.4) ② (35.05) ③ (28.6) ④ (44.0)	外面側部上半部ミガキ、他は荒れで不明 内面指オサエ、ハケメ 口縁部に2条の突帯 口縁部突帯間に着文スタンプが通る	A:3mm 以下の白色砂粒・長石・雲母を含む B:良好 C:内2.5Y8/1 灰白色-N4/ 灰白色 外5Y6/1 灰白色-N3/ 褐色	
14	陶器	椀	SD01	② (4.9)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉調2.5Y8/3 淡黄褐色 胎土2.5Y8/3 淡黄褐色	肥前産・17C 第2-3期 半期 王子手板
15	陶器	椀	SD01	② (3.85)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉調2.5Y7/2 黄褐色-2.5Y4/4 オリーブ褐色 胎土2.5Y5/1 黄褐色	肥前産・17C 前~中葉
16	陶器	皿	SD01	① (22.6) ② (6.2) ③ (7.6)	内外面施釉 器付軸刺し 口縁部輪花	A:精良 B:良好 C:釉調2.5Y6/3 に近い黄褐色-2.5Y4/2 暗黄褐色 胎土10YR4/2 灰赤褐色	肥前産・17C 中葉
17	陶器	皿	SD01	① (40.0) ② (8.5)	内~外面体部中位軸刺下部以下で蓋胎 内面に花草文を鉄粒と緑粒で描く	A:精良 B:良好 C:釉調2.5Y8/2 灰白色 胎土・筋胎5YR4/4 に近い赤褐色	鉄粒と緑粒の二彩手 肥前産・17C 後半
18	陶器	皿	SD01	① (21.6) ② (5.54) ③ (7.6)	内面~口縁部外面施釉 側部外面露胎 見込み・器付日痕あり	A:精良 B:良好 C:釉調2.5Y4/3 オリーブ褐色 露胎 10YR5/3 に近い黄褐色 胎土10YR5/1 褐色	内面に白化粘土の硝毛による流状文 1630~1650年代
19	陶器	皿	SD01	② (3.0) ③ (4.9)	内外面施釉(内面銅緑釉・外面透明釉) 高台露胎 見込み蛇の目輪刺し	A:精良 B:良好 C:釉調内面5B3/1 暗青灰色 外面5Y7/2 灰白色・7.5Y5/3 灰オリーブ褐色 露胎5Y8/1 灰白色	肥前船野内野山産・17C 第4期半期-18C 前半
20	陶器	皿	SD01	① (15.6) ② (1.8)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉調5YR6/3 に近い褐色 胎土10YR7/4 に近い黄褐色	肥前産・17C
21	陶器	片口鉢	SD01	② (9.25)	内面~口縁部外面施釉 側部外面露胎	A:精良 B:良好 C:釉調2.5Y8/1 灰白色 露胎 5YR4/6 赤褐色	肥前産・1500~1630年代
22	陶器	鉢	SD01	② (4.1)	無胎	A:微細な砂粒をわずかに含む B:良好 C:内面5YR5/4 に近い赤褐色 外面2.5YR3/4 暗赤褐色 胎土5YR6/1 褐色	真前産か?
23	陶器	片口鉢	SD01	② (4.55)	内外面施釉 口縁部を土練状に丸くつくる	A:精良 B:良好 C:釉調2.5Y7/2 灰白色 胎土10YR6/3 に近い黄褐色	真前山野・高取産か?
24	陶器	壺	SD01	② (4.5)	内面鉄粒、外面施釉 内面露胎	A:精良 B:良好 C:釉調2.5Y6/3 に近い黄褐色-2.5Y4/3 オリーブ褐色 露胎2.5Y6/6 黄褐色-2.5Y5/6 黄褐色 胎土2.5Y7/1 灰白色	生地が2枚合わせになる

表3 御笠の森遺跡第4次調査出土土物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	流量 (cm・g) ①(口徑×器高)或 径×高(径×最大 径本 (復元値) (残存値)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調			備考
						A:胎土	B:焼成	C:色調	
25	青磁	椀	SD01	② (2.7)	内外面施釉 外面に幅広い刷毛遣文	A:精良 B:良好 C:釉調10Y8/2灰白～10Y5/2オリーブ灰色 胎土10Y7/1灰白色			中国産・15C
26	青磁	椀	SD01	① (14.4) ② (4.5)	内外面施釉 1線部輪花内面整理し文	A:精良 B:良好 C:釉調25GY6/1オリーブ灰色～25GY4/1 暗オリーブ灰色 胎土N6/灰色			肥前産・17C中葉
27	磁器	色絵椀	SD01	①(13.0) ②(4.45)	内外面施釉 1線部に青色の胎土緑色地で草花・蝶に格子文を掻く	A:精良 B:良好 C:釉調薄緑がかった透明色 胎土N8/灰白色			肥前有田産か?・1600～1650年代
28	磁器	染付椀	SD01	①(12.0) ②(4.45)	内外面施釉 外面に巻弁文を掻く	A:精良 B:良好 C:釉調7.5GY8/1 明緑灰色 胎土2.5Y8/2 灰白色			肥前産・17C後半
29	磁器	染付椀	SD01	① (10.0) ② (2.8)	内外面施釉 外面に網目文を掻く	A:精良 B:良好 C:釉調7.5GY7/1 明緑灰色 胎土N8/ 灰白色			肥前産・17C中葉
30	磁器	染付椀	SD01	② (3.7)	内外面施釉 外面に鹿を掻く	A:精良 B:良好 C:釉調2.5GY8/1 灰白色 胎土N8/ 灰白色			中国漳州産、16C末～17C第1四半期
31	磁器	天目椀	SD01	② (3.9)	口縁部内面～胴部黒釉内面体部灰釉 内面一部露胎	A:精良 B:良好 C:釉調外面10YR3/4 暗褐色～10YR1.7/1 黒色 内面10YR7/1 灰白色・10YR1.7/1 黒色 露胎7.5YR6/4 にぶい橙褐色胎土10YR8/1 灰白色			肥前産、1650～1640年代
32	青磁	皿	SD01	② (2.25)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉調2.5GY8/1 灰白色～2.5GY6/1 オリーブ灰色 胎土N8/ 灰白色			肥前産・1630～1640年代
33	磁器	染付皿	SD01	① (13.4) ②(3.6) ④(4.6)	内外面施釉 高台輪調き・砂目あり 見込みに6弁の花文と二重線縁を掻く	A:精良 B:良好 C:釉調10G7/1明緑灰色 胎土7.5YR8/3 浅黄褐色			肥前産、1610～1630年代
34	磁器	染付皿	SD01	② (2.4)	内外面施釉 内面花文	A:精良 B:良好 C:釉調10GY8/1 明緑灰色 胎土N8/ 灰白色			肥前産、1630～1640年代
35	磁器	染付皿	SD01	② (2.35) ④ (7.2)	内外面施釉 外部菊花形に波打つ 高台笠付輪調き 見込みに爪を掻く	A:精良 B:良好 C:釉調7.5GY8/1 明緑灰色 胎土N8/ 灰白色			肥前産、1630～1640年代
36	白磁	小皿	SD01	② (1.6) ④(4.6)	内外面施釉 見込み輪調き 高台削り出し・露胎	A:精良 B:良好 C:釉調白色			中国産
37	白磁	小杯	SD01	② (2.6) ④(2.4)	内面～外部上外面施釉 胴部下以下露胎 型押し成形	A:精良 B:良好 C:釉調7.5GY8/1 明緑灰色 胎土7.5Y8/1 灰白色			肥前産、1640～1650年代
38	白磁	小杯	SD01	② (3.5) ④(2.6)	内外面施釉 高台部露胎付着	A:精良 B:良好 C:釉調7.5Y8/1 明緑灰色 胎土N8/ 灰白色			肥前産、1630～1640年代
39	瓦	軒丸瓦	SD01	残存長87 残存幅6.1 最大厚2.3 重さ190.4	瓦面 格子目タキのちり消し 凹面 布目	A:微細な白色砂粒・石灰・石膏・雲母を含む B:良好 C:凸面 2.5Y5/1 黄灰色 凹面 7.5YR6/2 灰褐色			内外ケズリ痕あり 外面保付着
40	石製品	石鍋	SD01	②(4.2) 最大幅24 重量77.1					
41	土製品	煙管	SD01	全長105 最大幅25 最大厚2.3 穿孔部径0.4 穴部径0.9	ナデ	A:微細な白色砂粒・雲母を少量含む B:良好 C:10YR8/2 灰白色～10YR4/1 褐色灰色			キセル層首節
42	陶器	皿	SK01	② (1.6)	内外面施釉 輪花里	A:精良 B:良好 C:釉調5Y8/4 淡黄～5Y5/6 オリーブ色 胎土5Y8/2 灰白色			瀬戸産・16C後半
43	陶器	小皿	SK01	② (2.2)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉調7.5Y8/1 灰白色 胎土7.5Y6/1 灰褐色			朝鮮半島産・灰青沙器・16C代
44	磁器	染付椀	SK01	② (2.0)	内外面施釉 外面植物文 内面花文	A:精良 B:良好 C:釉調2.5GY8/1 灰白色 胎土N8/ 灰白色			中国景德鎮産、16C末～17C初
45	須恵器	杯身	SK02	② (2.8)	内外面同軸ナデ	A:2mm以下の白色砂粒・褐色砂粒を含む B:良好 C:内外5Y7/1 灰白色			
46	土師器	杯	SK02	①10.6 ②(2.6) ③(3.65)	底部外面静止糸切り 底部内面不定方向ナデ 他は同軸ナデ	A:微細な白色砂粒・褐色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外10YR7/2 にぶい黄褐色～10YR7/1 灰白色			内面保付着 歪みあり
47	土師器	杯	SK02	② (1.3) ③(3.7)	底部外面糸切り 底部内面不定方向ナデ 他はナデ	A:2mm以下の白色砂粒・褐色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外5YR6/2 灰褐色 外7.5YR6/4 にぶい褐色			
48	土師器	杯	SK02	② (1.5) ③(3.6)	底部外面糸切り 内外面ナデ	A:2mm以下の白色砂粒・褐色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外10YR7/6 明黄褐色～10YR6/1 褐色			体部内面保付着 底部内面凹形に変色
49	土師器	小皿	SK02	② (2.3) ③ (6.0)	体部内外面ナデ	A:1mm以下の白色砂粒・褐色砂粒を含む B:良好 C:内外7.5YR7/4 にぶい褐色			底部内面粘土巻き上げ痕あり
50	土師器	高杯	SK02	② (2.2) 脚基径5.0		A:2mm以下の白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外5YR6/1 褐色～7.5YR7/4 にぶい褐色 外10YR7/3 にぶい黄褐色～7.5YR7/4 にぶい褐色			
51	瓦質土器	片1付鉢	SK02	② (6.8)	外面ナデ 内面上位ハグメ 内面下位窪目あり	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外5Y7/1 灰白色～2.5Y7/3 浅黄褐色 外2.5Y8/2 灰白色～5Y5/1 灰褐色			
52	瓦質土器	鉢鉢	SK02	② (6.3)	内外面ナデ 内面窪目あり	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外5YR2/1 黒褐色 外5YR2/1 黒褐色 5YR5/2 灰褐色			内外面保付着 遺品系か?

表4 御笠の森遺跡第4次調査出土土物観察表③

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①(口徑)②(高さ)③(底径)④(高径)⑤(最大径)⑥(重(元値)) (残存値)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
53	瓦質土器	鉢鉢	SK02	② (69)	外面ハケメ後ナデ 内面ハケメ後ナデ、節目	A:微細な砂粒を少量含む B:良好 C:内7.5YR3/1黒褐色・7.5YR7/4にぶい褐色 外7.5YR2/1黒色	
54	瓦質土器	片口蓋鉢	SK02	① (20.3) ②(8.4) ③ (22.0)	外面ナデ、指オサエ 内面ナデ 内面黒目あり	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内N8/灰白色・N7/灰白色 外N5/灰褐色	
55	瓦質土器	鉢鉢	SK02	② (5.1) ③ (15.0)	体部外面ハケメ一部指オサエ 他はナデ 内面黒目あり	A:4mm以下の白色砂粒、石英を含む B:良好 C:内外7.5YR8/3浅黄褐色、5YR7/6褐色	
56	瓦質土器	火鉢	SK02	② (5.1)	外面ミダキ様の丁寧なナデ 内面指オサエ、ハケメ 口縁部に1本の突帯 口縁部突帯の上下にスタンプが通る	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む B:良好 C:内外10YR6/1褐色	
57	瓦質土器	蓋	SK02	①(19.2) ②(15.1) ③ (27.3) ④(12.3)	体部外面下位ハケ後ヘラ削り 体部内面上位ハケメ、指オサエ 体部内面中央位ハケメ 口縁部外面ハケ後ナデ 口縁部内面ナデ 肩部外面上位ヘラ書き施文	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR4/1褐色色-10YR3/2黒褐色	須賀近に近い 胴部下半部保付者
58	瓦質土器	蓋	SK02	①(15.4) ②(12.1) ③ (24.05)	体部内外面ナデ 肩部内面ハケメ 口縁部内外面ヨコナデ 体部外面中央位突帯削り付 肩部外面スタンプ文、ヘラ書き施文	A:微細な白色砂粒、雲母を少し含む B:良好 C:内外2.5Y4/1黄灰色-2.5Y2/1黒色	体部外面下位保付者
59	瓦質土器	蓋	SK02	①(15.2) ②(10.0) ③ (29.7)	外面ハケメ、ミダキ 内面ハケメ後ナデ、指オサエ 胴部上面ハケ後ミダキ 胴部下位ハケメ 肩部梅花文スタンプが通る	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外N4/灰色-2.5Y2/1黒色	胴部下面より下被熱、保付者
60	瓦質土器	蓋	SK02	② (22)	外面カキメ 内面ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む B:良好 C:内外2.5YR7/4 浅赤褐色・10YR7/2にぶい黄褐色	
61	瓦質土器	不明品	SK02	② (2.1)	回転ナデ	A:2.5mm以下の白色砂粒、少量の石英と雲母を含む B:良好 C:内10YR8/3 浅黄褐色 外10YR8/3 浅黄褐色-10YR5/8黄褐色	小片
62	赤生土器	甕	SK02	② (5.9)	内外面ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、石英、雲母、微細な黒色砂粒を含む B:良好 C:内5YR8/3 淡褐色 外5YR8/2灰白色-5YR7/6褐色	
63	陶器	椀	SK02	② (3.4) ③(3.0)	内外面施釉 雲付輪割ぎ 見込み砂目痕あり	A:精良 B:良好 C:輪割7.5GY 明緑灰色 胎土7.5YR7/4にぶい褐色	井戸基礎・16C代
64	陶器	椀	SK02	② (3.7)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:輪 透明 露胎 10YR8/2灰白色	肥前産、17C後半頃
65	陶器	椀	SK02	① (7.0) ②(4.15) ③ (3.0)	外面 施釉 体部下手-底部露胎 底部垂切り 内面施釉	A:2.5mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:輪10YR7/1灰白色 胎土5YR6/4にぶい褐色 外5YR4/8赤褐色	肥前産、1500-1610年代
66	陶器	椀	SK02	② (3.6) ③(4.7)	外面体部中央位施釉 高台付足露胎 内面施釉	A:精良 B:良好 C:輪割7.5Y 7/1灰白色 胎土7.5YR7/3にぶい褐色	肥前産、1500-1610年代
67	陶器	高台付皿	SK02	② (1.6) ④(4.65)	内外施釉 体部下手・高台・高台内面施釉 雲付付、高台内砂目跡 見込み土層割が認められる	A:2.5mm以下の砂粒、雲母を微量含む B:良好 C:輪 7.5Y7/2 灰白色-7.5Y4/3 暗オリーブ色 胎土7.5Y6/1灰褐色	肥前三川内産高台? 1610-1630年代
68	陶器	皿	SK02	② (1.9)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:輪割5YR8/1 灰白色 胎土5YR6/3にぶい褐色	肥前産、1500-1610年代
69	陶器	小皿	SK02	① (11.4) ② (3.2) ③ (5.2)	内外面施釉 見込み砂目あり	A:精良 B:良好 C:輪割6GY8/1 灰白色 胎土2.5Y7/1灰白色	朝鮮半島産-灰青沙器・15-16C代
70	陶器	鉢	SK02	② (5.1) ③ (10.0)	内外無釉 内外回転ナデ 露胎底	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む B:良好 C:内7.5YR7/4にぶい褐色 外5YR6/4にぶい褐色	太平洋分銅陶器鉢Ⅷ類か?
71	陶器	鉢	SK02	② (4.2)	口縁部は生地を外面に削り込んで作る	A:灰色・黒色・白色の微細砂粒が多く、石英も含む B:良好 C:内5YR5/6 明赤褐色 外5YR4/4にぶい赤褐色-5YR3/1黒褐色	
72	陶器	鉢	SK02	② (5.4)	内外面施釉 内外面回転ナデ 内面タタキの痕跡	A:精良 B:良好 C:輪割10YR5/3にぶい黄褐色 胎土10YR6/1褐色色-10YR3/1黒褐色	
73	陶器	鉢鉢	SK02	② (4.0)	焼き締め?	A:2mm以下の白色砂粒と微細な黒・白色砂粒が多く、雲母を少量含む B:良好 C:内2.5GY5/1 オリーブ灰色から2.5GY4/4 灰色 外2.5GY8/1 灰白色-N6/ 灰褐色	備前産鉢鉢Ⅷ-VI期
74	陶器	鉢鉢	SK02	① (27.6) ② (14.15) ③(14.0)	底部内外面ナデ 他は回転ナデ 内面黒目あり	A:3mm以下の白色砂粒、長石類を含む B:良好 C:内外10R6/8 赤褐色-10R4/1 暗赤灰色	備前産鉢鉢Ⅷ-VI期

表5 御笠の森遺跡第4次調査出土遺物観察表④

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口徑②器高③底径④高台径⑤最大径⑥(底元径) (残存量)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
75	陶器	鉢鉢	SK02	①(29.0) ②(10.7)	内外面回転ナデ 口縁部に3本の浅い凹線がめぐる	A:5mm以下の小石、微細な黒色・白色砂粒を含む B:良好 C:外面25YR7/1明赤灰色~25YR6-6褐色 内面10R5-6赤色	口縁部外面一部降灰により灰白色 器口・内底面使用により器面磨耗 胎面産部鉢鉢Ⅴ-Ⅶ期
76	陶器	鉢鉢	SK02	①(28.0) ②(3.8)	口縁部内外面施釉 内外面回転ナデ 内面窪みあり	A:精良 B:良好 C:輪調25YR2-2暗赤褐色 露胎25YR5-6明赤褐色	肥前産・17C前半頃
77	陶器	壺	SK02	②(5.5)	内面施釉 外面露胎	A:細かい黒色粒を少量含む B:良好 C:内75YR5-6明褐色 外75YR6-4にぶい褐色~75YR5-6明褐色	
78	陶器	壺	SK02	①(15.4) ②(3.0)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:輪調外面25YR 5/1赤灰色 内面25YR2-2灰赤色 胎土5YR5/4にぶい赤褐色	肥前産・17C前半か
79	陶器	壺	SK02	②(4.1)	内外面施釉	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:輪調外面25YR 5/4にぶい赤褐色 内面5YR5/3にぶい赤褐色 胎土75YR6/1褐色	中国産・13~14C頃
80	磁器	染付碗	SK02	②(1.8)	内外面施釉 外面花文?	A:精良 B:良好 C:輪 透明な薄緑色	中国景德鎮産産・16C前半~中葉
81	白磁	碗	SK02	②(3.8) ④(7.0)	底部内面~高台部外面施釉 内面羅目文施文	A:精良 B:良好 C:輪5Y6-2灰オリーブ色 露胎25YR7/2灰黄色 胎土2.5Y7/1灰白色	胎面産分類白磁碗Ⅴ-B型
82	白磁	碗	SK02	②(2.5)	底部内面~体部外面施釉	A:精良 B:良好 C:輪75YR1-1灰白色 露胎N8/灰白色	太宰府分類白磁碗Ⅴ類
83	白磁	碗	SK02	③(3.1)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:輪5YR1-1灰白色 胎土2.5YR1-1灰白色	太宰府分類白磁碗Ⅴ類
84	磁器	染付碗	SK02	①(14.2) ②(5.5) ④(5.3)	内外面施釉 外面花鳥文	A:精良 B:良好 C:輪10B7/1明青灰色 露胎25YR1-1灰白色	中国景德鎮産産・16C前半~中葉 136と同一個体
85	磁器	染付碗	SK02	①(9.2) ②(4.5) ④(3.55)	内外面施釉 帯付砂目あり 外面羅目文	A:細かい黒色粒を含む B:良好 C:輪 淡い明青灰色 胎土N7/灰白色	肥前産・1640~1660年代
86	白磁?	碗	SK02	②(3.7)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:輪 透明色 胎土白色	中国福建・1610~17C中葉 玉子手輪
87	白磁	碗	SK02	②(4.8)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:輪 透明感のある青緑色 胎土10YR1/灰白色	中国産か?
88	青磁	高台付碗	SK02	②(2.3) ③(4.9)	内外面施釉 高台内露胎	A:精良 B:良好 C:輪 25Y7-2灰黄色~25Y6-3にぶい黄色 胎土7.5YR7-6褐色	見込みに「金土調文」の文字 高台に3路溝 露胎部あり 中国泉原産・15C
89	青磁	碗	SK02	②(2.3) ③(4.9)	内外面施釉 高台露胎	A:精良 B:不良 C:輪調25YR2-2灰白色 胎土7.5YR8-2灰白色	中国泉原産か? 14C末~15C
90	磁器	染付皿	SK02	①(11.8) ②(2.9) ③(3.6)	内外面施釉 底部外面施釉 日輪調さ 底面外面施釉 砂付者 見込み目跡あり 新筒底 見込み水文章	A:精良 B:良好 C:輪 青黄緑色 露胎5Y7/1灰白色	中国産・16C前半~中葉
91	白磁	皿	SK02	①(11.0) ②(2.35)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:輪 25YR1-1灰白色 胎土5YR1-1灰白色	中国景德鎮産産・16C
92	白磁	皿	SK02	①(11.1) ②(2.7) ④(5.9)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:輪 5YR1-1灰白色 露胎N8/灰白色	中国景德鎮産産・16C
93	青磁	角皿	SK02	①(20.2) ②(6.9)	内外面施釉 型打ち成形	A:精良 B:良好 C:輪 明オリーブ色 胎土N8/灰白色	肥前産佐波見 脚付角皿・1630~1640年代
94	磁器	染付皿	SK02	①(12.4) ②(3.05) ③(4.9)	内外面施釉 帯付輪調さ 砂目あり 見込み流水・春花文	A:細かい黒色粒を少量含む B:良好 C:輪 灰白色 露胎N8/灰白色	肥前産・17C前半
95	磁器	染付皿	SK02	①(12.2) ②(2.9) ④(5.85)	内外面施釉 型打ち成形 帯付輪調さ・砂目あり	A:精良 B:良好 C:輪 淡い青灰色 露胎5YR1-1灰白色	口縁部輪花状を含む 肥前産・17C中葉
96	磁器	染付皿	SK02	①(11.0) ②(2.8) ③(4.9)	内外面施釉 露筒底 底部露胎・日跡あり 見込み羅網内側に人形文字文	A:精良 B:良好 C:輪 5YR1-1灰白色 露胎25YR1-1灰白色	中国漳州産産か? 16C後半
97	白磁	皿	SK02	②(4.2) ④(6.4)	内外面施釉 帯付輪調さ	A:精良 B:良好 C:輪 7.5YR1-1明緑灰色 胎土白色	内面外底面露 外面中央に指跡あり 肥前産・1630~1650年代
98	磁器	染付皿	SK02	②(1.9)	内外面施釉 外面露筒底 露筒底 内面羅網1条	A:茶色・黒色の微細砂粒を含む B:良好 C:輪 2.5GYR1-1灰白色~2.5GY6/灰色 胎土5YR6-2灰褐色	中国漳州産産か? 16C後半~17C初
99	瓦	平瓦	SK02	残存長5.8 幅6.1 厚さ1.6 重さ68.3	凸面羅目状 凹面調整不明	A:2mm以下の白色・黒色砂粒 雲母を多く含む B:不良 C:凸面10YR7/1灰白色~10YR5-1褐色	
100	鉄器	針?	SK02	全長7.25 幅0.4 最大厚0.45 重さ2.9			

表6 御笠の森遺跡第4次調査出土遺物観察表⑤

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口徑②器高③底径④高台径⑤最大径⑥(最大径) (底径) (残存幅)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
101	鉄器	針?	SK02	残存長9.3 幅0.15 最大厚0.45 重さ 3.4			
102	鉄器	棒状鉄製品 /馬鞍?	SK02	残存長5.25 最大 幅1.4 最大厚0.95 重さ7.5			
103	石製品	石函	SK02	① (8.3)	内外面削り		地下平塚付着 滑石製
104	石製品	砥石?	SK02	残存長4.15 幅3.9 最大厚1.45 重さ 42.6			砂岩製
105	石製品	砥石?	SK02	残存長7.25 幅6.2 最大厚4.7 重さ 39.1			泥岩か?
106	土製品	土鈴	SK02	残存長2.15 縦孔 径0.3	ナデ成形 内面シボり あり	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C: 内外2.5Y7/1 灰白色	
107	土製品	土鈴	SK02	残存長2.2 縦孔径 0.5	ナデ成形 内面シボり あり	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C: 内外10YR7/3 に近い黄褐色	
108	土製品	土鈴	P3	全長10.5 最大径2.5 最大厚2.3 縦孔径 0.8	ナデ成形	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C: 10YR8/3 浅黄褐色	
109	磁器	小杯	P8	② (1.5) ③ (3.3)	内外面施釉 高台露胎	A:やや粗い B:良好 C:釉調5Y8/1 灰白 色 胎土2.5Y8/2 灰白色 露胎10YR6/2 灰黄 褐色	肥前産
110	磁器	象付皿	P.13	① (12.0) ② (2.7)	内外面施釉 内面濃緑・外 面草花文?を施す 外面 破断面縁一部露胎	A:精良 B:良好 C:釉調5Y7/2 灰白色 胎土10YR6/2 灰黄褐色 露胎10YR6/2 灰黄 褐色	中国漳州窯産・16C後半
111	土師器	小皿	P.28	① (8.8) ② (1.2)	内外面ココナテ 底部糸 切	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C: 内外10YR3/1 黒褐色 外10YR8/3 浅黄褐色	内面塚付着 赤みあり
112	土師器	杯	P.34	② (1.2)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C: 内外10YR8/3 浅黄褐色	口縁部下に焼成穿孔 あり
113	瓦質土器	鉢鉢	P.35	① (30.0) ② (11.0)	外面器面荒れのため調整 不明 内面斜め方向ハ ナデナテ 意匠あり	A:4mm以下の白色砂粒・長石・石英を多量 に含む B:やや不良 C:内外 10YR8/3 灰 白色	部目は使用のため一部 磨滅し、器面も粗
114	陶器	皿	P.36	① (12.0) ② (3.45) ④ (4.1)	内面~口縁部外面施釉 体部~ナズリ高台露胎 内外面目跡あり	A:精良 B:良好 C:釉調7.5YR6/2 灰オリー ブ色 胎土7.5YR5/4 に近い褐色	肥前産・1610~1630年 代
115	須恵器	杯蓋	P.47	① (18.0) ② (1.6)	内外面回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を多量に含む B: 良好 C:内外 10YR7/2 に近い黄褐色・ 10YR4/1 褐色	口縁部外面一部黒色。 重ね焼きの痕跡 内面 塚付着
116	瓦質土器	鉢鉢	P.50	② (2.7) ③ (11.0)	外面指ササエ・ナデ 内 面ナテ 楕円あり	A:3mm以下の白色砂粒・長石・雲母を含む B: 良好 C:内 2.5Y8/1 灰白色~N4/ 灰色 外 5Y6/1 灰色~N3/ 褐色	使用により内面磨耗
117	土師器	小皿	P.52	① (8.2) ② (1.4) ③ (6.0)	内外面回転ナデ 底部糸 切	A:微細な白色砂粒・雲母を少量含む B:良 好 C:内外 10YR8/3 浅黄褐色	
118	土師器	杯	P.58	① (12.6) ② (2.4) ③ (3.7)	体部内~外面 回転ナデ 内底面不定方向ナデ、外 底面回転糸切	A:1mm以下の白色砂粒・雲母を含む B: 良好 C:内10YR7/3 に近い黄褐色~10YR6/1 褐色 外10YR7/2 に近い黄褐色~10YR6/2 灰黄褐色	内面塚付着
119	土師器	小皿	P.62	① (8.1) ② (1.5) ③ (5.8)	内外面 回転ナデ、外底 面回転糸切	A:微細な白色砂粒少量と雲母を含む B:良 好 C:内外 10YR8/3 浅黄褐色~10YR6/1 褐 灰色	
120	鉄器	針?	P.72	全長4.05 幅1.0 最大厚1.0 重さ6.8			
121	陶器	鉢鉢	P.81	② (4.3)	口縁部内外面のみ鉄軌 内面目目	A:5mm以下の雲母を多く含む B:良好 C:口縁部釉調 2.5YR4/3 に近い赤褐色 胎土 2.5Y6/1 黄褐色	肥前産・17C前半
122	土師器	杯	P.85	① (12.2) ② (2.5) ③ (10.7)	内外面回転ナデ、内底面 不定方向ナデ、外底面 回転糸切	A:3mm以下の白色・赤色砂粒と雲母を含む B:良好 C:内外 7.5YR7/4 に近い褐色	口縁部赤みあり
123	瓦器	椀	P.85	① (17.0) ② (5.7) ③ (7.0)	内面見込みミガキ 口縁 部から体部器面荒れで不 明 口縁部ナテ 外面 ミガキ 高台内板状圧痕 残ナテ	A:5mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C: 内N8/ 灰色~N6/ 灰色 外 N4/ 褐色	口縁部内面~外面炭 灰着色 高台内・高台輪 に板状圧痕あり
124	瓦器	椀	P.85	② (1.1) ③ (6.8)	内面ミガキ 外面ナテ 底部中央部に穿孔あり	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内 N8/ 灰白色 外 N1/ 灰色	
125	白磁	皿	P.85	① (1.7) ③ (3.2)	内面~胴部外面施釉 底 部付立露胎 糸切ナテ	A:精良 B:良好 C:釉調5Y8/3 浅黄 色 胎土5Y8/1 灰白色	太宰府分類ⅡⅠ-1-b 類
126	陶器	天目椀	P.86	② (2.2)	内外面施釉 (口縁部内外 面に暗赤褐色の釉、以 下は黒釉)	A:精良 B:良好 C:釉調5YR3/4 暗赤褐 色 5YR2/2 黒褐色 胎土5Y6/1 灰 白色	中国建築産・14~15C
127	青磁	壺	P.86	② (3.8)	内外面施釉 外面浅い沈 澱あり	A:黒色砂粒を少量含む B:良好 C:釉調 内9.7.5Y5/2 灰オリーブ色 胎土7.5Y5/1 灰 白色	越前窯系か?

表7 御笠の森遺跡第4次調査出土土物観察表⑥

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径④高台径⑤最大径⑥(復元数) (残存数)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
128	鉄器	釘?	P-86	全長34 幅11 最大厚11 重さ7.3			
129	白磁	小皿	P-88	② (1.35)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉調7.5YR/2 灰白色~7.5Y7/2 灰白色 胎土7.5YR8/1 灰白色	中国産・14C前半の可能性
130	青磁	椀	P-93	① (1.6) ② (7.8)	高台内/見込み中央部輪縁さとの	A:精良 B:良好 C:釉調2.5GY6/1 オリーブ灰色 胎土N7/灰白色	龍泉窯産・14C後半~15C前半
131	磁器	乗付椀	P-97	① (11.0) ② (3.7)	内外面施釉 内外面磨目文 見込みに二重圈縁	A:精良 B:良好 C:釉調2.5GY8/1 灰白色 胎土5YR8/1 灰白色	高台近くまで残存 肥前産・17C前~中葉
132	土製品	土鈴	P-98	残存長3.35 最大幅3.05	ナデ成形 内面シボリ痕あり	A:微細な砂粒、雲母を含む B:良好 C:内10YR6/2 灰黄褐色~5YR7/6 外10YR4/2 灰黄色	
133	土製品	蓋	P-99	① (11.6) ② (2.0)	内外面白無釉	A:2mm以下の白色砂粒を微量含む B:良好 C:釉調2.5Y5/4 黄褐色 胎土2.5YR4/6 赤褐色	肥前産・1590~1630年代
134	金属製品	不明製品	P-100	全長3.8 幅1.35 最大厚0.55 重さ1.3			
135	白磁	椀	P-126	① (15.6) ② (4.3)	内面~口縁部外面施釉 体部外面露胎	A:精良 B:良好 C:釉調内面10YR8/2 灰白色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色・10YR8/2 灰白色	太宰府分類白磁椀V類
136	磁器	乗付椀	P-127	② (2.7)	内外面施釉 外面に鳥かたち模刻	A:精良 B:良好 C:釉調2.5GY8/1 灰白色 胎土5YR8/1 灰白色	84と同一個体 中国産・遼州椀
137	陶器	皿	P-Y	② (1.4)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉調2.5GY8/1 灰白色 胎土N8/灰白色	全体的に薄く均一に釉がかかっている 中国産か?・13~14C代
138	白磁	椀	P-Y	② (5.9) ④ (6.6)	内外面施釉 高台露胎 高台外面輪垂れ 内面磨目文 見込みに浅い沈線状の段あり	A:精良 B:良好 C:釉調7.5Y7/2 灰色 胎土10YR7/1 灰白色	太宰府分類白磁椀V類
139	陶器	皿	横出面	② (2.1)	内外面施釉 内面に鉄絵が描かれる	A:精良 B:良好 C:釉調2.5Y6/2 灰黄色 胎土7.5YR4/1 褐灰色	肥前産・1590~1610年代
140	陶器	部鉢	不明	①29.2 ②41.7 ③10.7	口縁部内外面鉄絵による施釉 外面回転ナデ 底部赤切	A:精良 B:良好 C:釉調5YR3/2 暗赤褐色 胎土5YR5/2灰褐色~2.5YR6/6 褐色	見込み・口縁部に目録あり 掘目・内底面使用により器面磨耗 肥前産
141	石製品	石臼	不明	残存長19.2 残存幅17.6 厚さ9.7 重さ4.00			

表8 御笠の森遺跡第7次調査出土土物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径④高台径⑤最大径⑥(復元数) (残存数)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
142	土師器	椀	SD01	② (2.2) ④ (9.6)	内外面ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR 7/3 にぶい褐色	
143	土師器	高杯	SD01 上層	② (7.0) 脚高部径3.3	脚部外面ハケメ 他はナデ 脚部内面シボリ痕あり	A:微細な白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内外10YR 7/3 にぶい黄褐色	
144	土師器	甕	SD01 上層	② (10.4)	外面ナデ 内面ハケメ一部指サエ	A:4mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を多く含む B:良好 C:内2.5YR 5/8 にぶい赤褐色~2.5YR3/1 暗赤灰色 外2.5YR 5/8 暗赤褐色~2.5YR2/1 赤褐色	内外面露胎着
145	弥生土器	部台	SD01	② (16.1) 下層径16.7	外面~内面下層ハケメ 内面上端ナデ	A:4mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR 7/3 にぶい褐色~5YR6/8 褐色	
146	縄文土器	甕	SD02	② (3.05)	内外面ナデ 口縁部突帯 胎付	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR 7/4 にぶい褐色	
147	石製品	石碾	SD02	残存長3.85 最大幅1.6 最大厚0.7 重さ2.9			黒曜石製
148	土師器	SX03 第6群		① (9.8) ② (4.25) ⑤ (10.0)	外面ナデ 内面倒り残ナデ	A:微細な白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内5YR6/4 にぶい褐色 外5YR5/3 赤褐色	
149	土師器	SX03 第7群		① (10.4) ② (5.0)	体部外面下位ハケメ 他はナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR4/1 褐灰色 外7.5YR5/4 にぶい褐色	内外面露胎あり
150	土師器	SX03 第3群		② (2.3)	外面ハケメ 内面ナデ、指サエ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内5YR7/6 褐色 外5YR3/1 黒褐色	外面黒度あり



表9 御笠の森遺跡第7次調査出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径④高台径⑤最大径⑥(底元径) (残存量)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
151	土師器	碗?	SX03 第6群	② (22)	外面ナデ 内面ナデ、指オサエ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内75YR7/4にぶい橙色 外5YR7/6橙色-5YR6/1黒褐色	
152	土師器	碗?	SX03 第5群	② (24) ③5.4	外面ナデ 内面ナデ、指オサエ	A:微細な白色砂粒、3mm以下の長石を含む B:良好 C:内5YR6/6褐色 外5YR6/6褐色-5YR4/1黒褐色	外面黒染あり
153	土師器	碗?	SX03 第5群	② (28)	外面ハケメ、指オサエ 内面ナデ、指オサエ	A:微細な白色砂粒、長石、雲母を含む B: 良好 C:内5YR7/6褐色 外75YR7/4にぶい 褐色	
154	土師器	小型丸底甕	SX03 第7群	① (8.2) ② (4.75) ③ (8.1) 胴部径 (7.0)	体部外面ナデ 体部内面 削り 他はヨコナデ	A:微細な白色砂粒、長石、雲母を含む B: 良好 C:内外10YR8/2灰白色-10YR3/2灰 黄褐色	
155	土師器	小型丸底甕	SX03 第6群	② (5.85) ③ (9.2) 胴部径 (7.2)	胴部外面ハケメ 体部内 面ナデ、指オサエ 他はナデ	A:4mm以下の長石、微細な白色砂粒、雲母 を含む B:良好 C:内75YR7/4にぶい褐色 外75YR5/2灰褐色-75YR3/1黒褐色	外面黒染あり
156	土師器	高杯	SX03 第7群	① (15.2) ② (3.7)	内面下位ハケメ 他は ガキ	A:微細な白色砂粒、長石、石英、角閃石、雲 母を含む B:良好 C:内外75YR6/4にぶい 褐色	
157	土師器	高杯	SX03	① (13.1) ② (3.7)	内外面ミガキ	A:微細な白色砂粒、長石、角閃石、雲母を含 む B:良好 C:内外75YR6/4にぶい褐色	
158	土師器	高杯	SX03 第3群	② (7.7) 胴部径(2.8)	外面ハケメ 他はナデ 内面シボリ肌あり	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内5YR7/4にぶい褐色	
159	土師器	高杯	SX03	② (6.5) 胴部径 (3.4)	胴部外面ハケメ 脚部内 面工具肌	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内75YR7/4にぶい褐色 外 5YR7/6褐色	
160	土師器	高杯	SX03	② (2.8) 脚部径 (10.0)	脚部内面上位ハケメ 他 はナデ 1ト所穿孔	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内5YR6/4にぶい褐色 外 5YR4/1黒褐色	
161	土師器	甕	SX03 第8群	① (14.0-14.5) ② (9.85)	体部外面ハケメ 11線部 外面ハナ後ナデ消し 11 線部内面ヨコナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内10YR4/1黒褐色 外10YR3/1 灰黄褐色-10YR3/1黒褐色	体部内面-体部外面上 位黒染あり
162	土師器	甕	SX03	① (15.6) ② (10.3)	体部外面ハケメナデ 体 部内面削り 11線部内面 ヨコナデ 11線部外面ナ デ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内5YR4/1黒褐色 外75YR7/4 にぶい褐色-75YR3/1黒褐色	体部内外面塚付着
163	土師器	甕	SX03 第5群	① (14.2) ② (17.7) ③ (9.75)	体部外面ハケメナデ 体 部内面削り 胴部内外面 指オサエ、他はヨコナデ	A:4mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内外5YR4/8赤褐色-5YR2/1黒 褐色	11線部内面-体部外面 中位黒染あり
164	須恵器	杯身	SX05	① (13.2) ② (3.5) ④ (9.2)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内 N6/灰色 外N/5灰色	
165	白磁	皿	SX05	① (10.0) ② (2.0)	体部外面下位露胎 他は 施釉	A:精良 B:良好 C:釉10Y6/1灰色 露胎 2.5Y7/2灰黄色	
166	青磁	皿	SX05	② (1.0) ③ (7.1)	底部外面露胎 他は施釉 見込み輪状・へら状工具 による施文	A:精良 B:良好 C:釉7.5Y6/2灰ナリ アツ色 露胎7.5YR7/1明褐色	太宰府分館同定窯系青 磁皿1-1b類
167	土師器	甕	SX07	② (3.5)	外面ハケメ 内面ヨコハ ケ	A:微細な白色砂粒、長石、石英、雲母を 多く含む B:良好 C:内75YR5/3にぶい 褐色 外75YR5/2灰褐色	
168	土師器	甕	SX07	② (3.6)	11線部外面ハケメ後ナ デ消し 11線部内面ヨコハ ケナデ 他はナデ	A:微細な白色砂粒、長石、石英、雲母を含 む B:良好 C:内5YR6/6褐色 外5YR4/1 黒褐色	
169	瓦質土器	鍋	SX07	② (1.45)	内外面ヨコナデ	A:3mm以下の長石、微細な白色砂粒、石 英、雲母を含む B:良好 C:内外5YR3/1 黒褐色	内外面塚付着
170	縄文土器	甕	SX19	② (3.9)	内外面ナデ 11線部外面 細目突帯貼付	A:2mm以下の白色砂粒、長石を含む B: 良好 C:内外10YR7/3にぶい黄褐色	
171	須恵器	杯身	SX21	① (12.4) ② (2.4) ④ (7.1)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内 外N5/灰色	
172	陶器	壺	SX27	③ (3.4)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉5Y8/1灰白色- 5Y5/2灰ナリアツ色 胎土5Y5/1灰色	
173	石製品	石塩丁	SX27	残存長4.15 最大 幅5.0 最大厚0.65 重さ12.6			砥瓦岩製
174	瓦	平瓦	遺構検 出中	残存長7.5 最大幅 6.8 最大厚1.9 重さ9.18	西面布目肌・縦脊肌 凸 面黒目肌	A:微細な白色砂粒、長石を含む B:良好 C: 内面6YR7/4にぶい褐色 凸面75YR8/3 灰黄褐色	
175	石製品	不明品	遺構検 出中	残存長4.25 最大 幅4.25 最大厚1.7 重さ31.2			チャート質

## IV. まとめ

### 1. 御笠の森遺跡第4・7次調査成果について

第4次調査では、第3・8次調査で確認された江戸時代前期の区画溝と一連となる集落を囲む溝SD01と区画溝の内側の遺構群を確認した。SD01からは輸入陶磁器を含む多量の出土遺物があるが、最終的な埋没時期は17世紀後半ごろと考えられ、これまでの調査所見と矛盾は無い。

調査地内の遺構としては11世紀後半～12世紀前半のものから17世紀後半まで確認されたが、軒丸瓦など少量ながら奈良時代の遺物が確認されており、その時期の建物が存在したと考えられ、今後の調査に期待したい。調査地内で数多くのピットが確認されたが、建物跡の復元には至らなかった。

またSK01・02といった大型の土坑は、第9次調査3・4区において方形や長方形の土坑が集中する場所が知られており（註1）、これらは地下式の貯蔵施設と考えられる。

この他、図化していないがSK01・02、P-4・7などから焼土塊が出土している。焼土塊が出土した遺構からは、土師器・瓦器・陶磁器の出土があり、全体には17世紀後半以前にあたると思われる。焼土塊はいずれもスサを含むもので、小片のため性格を明らかにできないが、近接する第3次調査地で棒状鉄素材（註2）が出土しており、周辺で小規模な鍛冶が行われた可能性も想定できる。

御笠の森遺跡第7次調査は、溝2条と土坑が確認された。縄文時代晩期にあたるSD02は、北北東にのびた後に矩形に曲がり一部途切れながら北西にのびている。検出面が非常に粘性に富む状態であったことや一部途切れる部分が土橋であると考えられ、あるいは水田の周囲に巡らせた水路であったのかもしれない。

SX03は古墳時代前期の祭祀遺構と考えられるが、周辺で同時期の遺構は御笠の森遺跡第9次調査2区SX10くらいで、小規模で散漫な状況である。調査事例の増加を待って改めて評価が必要であるが、古墳時代前期にも地域開発にあたり折りが挙げられたのではなかろうか。

SD01は北北東から南南東にのびる平安時代の溝であるが、SD01周囲で確認された掘り込みを伴わない浅い落ち込みについては、SD01に流水があり、一部あふれるような状況があったことを示すものと考えている。この状況から、第7次調査地では平安時代以降、水田耕作を中心に土地利用が行われたと考えられよう。

### 2. 御笠の森遺跡周辺遺跡の中世～近世の動態について

ここで、御笠の森遺跡の歴史的な位置づけを明らかにするため、周辺遺跡の中世～近世の動態についてまとめておきたい。なお、対象としては御笠川西岸の大野城市内の遺跡とする。

#### 宝松遺跡

12世紀後半から13世紀初頭の遺構としては、第4次調査で南東から北西方向にのびる溝4次SD01と掘立柱建物が確認された。4次SD01は幅2.3mと広く、2本の溝が重複して掘られており、溝内からは多量の土器・陶磁器などが出土しており、この時期の区画溝の可能性が高い。



第24図 御笠の森遺跡周辺の中世～近世遺跡と条理地図（日野1976に加筆）

4次SD01に継続する遺構としては、17世紀前半代のものとして、1次SD03がある。これは17世紀前半の区画溝と想定されている。

なお、1次SD03に先行する1次SD02は幅が狭く、南東から北西方向にのびている。2次SD01も同様の方向にのびており、これらは1次SD03に先行する中世段階の溝であった可能性が高い。

## 川原遺跡

11世紀後半～12世紀後半ごろの遺構としては、井戸である4次SK01・02があり、集落の始まりと考えられる。第2次調査でも、時期不詳であるが古代末から中世に位置づけられる井戸SE01がある。第1次調査でも、12～13世紀に位置づけられる大型土坑1次SK01があり、この時期に集落が展開する様子が伺える。

13世紀に入ると、4次SE03、4次SK02があり、第3次調査では13世紀中頃の3次SK02・SX04があり、集落が継続する。3次SX05は14世紀以降と考えられ、15世紀代になると区画溝4次SD01が出現する。この溝は16世紀までは存続するが、17世紀代には継続しない。出土遺物には、12～13世紀代の高麗陶器壺や16世紀代の李朝陶器があり、交易に伴うものであることから、中心的な集落と考えられている。

17世紀になると、3次SX01は17世紀代、3次SX02と3次SD01・03は18世紀代と考えられ、近在する正平年中（1346～1369年）の創建と伝えられる本光寺との係わりが考えられている。

なお、川原遺跡の北側に位置する仲島・仲島本間尺遺跡では、中世～近世の遺構は、今のところ確認されていない。

## 村下遺跡

11～12世紀の遺構は確認されていないが、G地点SX01から「周通元寶」「威平元寶」「元豊通寶」が出土した。これらは初鑄955年から1078年のものであり、この時期の遺構が周辺にあると考えられる。

13～14世紀は、M地点SD04・05は南東から北西方向にのび、SD11もほぼ同じ方向にのびることから、同様の時期が考えられる。またM地点SX05も同様の時期を考えておきたい。

## 雑餉隈遺跡

17世紀代以前の遺構は確認されていない。第1次調査では、17世紀後半に遡る遺物も散見されるが、18世紀を中心とする。その他の第2・3次調査のいずれも18世紀代を中心とするものと考えられる。

なお、第4次調査では江戸時代後期の宝暦4年（1754）に運航が始まったとされる新川が調査されており、発掘調査によって位置が明らかになった。新川は宝暦12年（1762）には運航をやめ、一部は埋め戻し水田に復した他、場所によっては昭和時代まで埋め戻されなかった（註3）。

## 瑞穂遺跡

第5・9次調査で大溝が確認されている。大溝は、数度にわたり掘り返しがされており、中世のものとしては、中層で確認された9次SD07がある。9次SD07からは土師器小皿や美濃焼の灰軸陶器が出土しており、16世紀後半の時期にあたると考えられる。ただし、瑞穂遺跡内ではこのの中世遺跡は確認されておらず、大溝の性格はよく分かっていない。

## 石勺遺跡

11世紀後半～12世紀前半の遺構としては、K地点でSD05・15・18、SK16、SX29がある。K地点SX29からは、土坑内から粘土が出土しており、棒状土製品も出土している。東側に隣接するH地点3号土坑は、12世紀中頃～後半にあたり、墓の可能性はある。

13～14世紀の遺構としては、H地点SD02-aがある。溝は、およそ南西から北東方向にのびており、11世紀後半～14世紀中頃までの遺物を含み、時期は13世紀後半を中心とする。H地点SD02-aと近接・並行するH地点SD02-bも14世紀前半までに埋没する。H地点8号溝は北西から南東方向にのびる直線的な溝で、14世紀中頃と考えられる。H地点9号溝は13世紀中頃から14世紀初頭。H地点11号溝は14世紀代と考えられる。J地点SX36・SX07も13世紀前半～中頃の時期が考えられる。K地点SD10・SK11やSD11・12もこの時期にあたる。溝はH地点と同じく南西から北東方向にのびており、関連するものと考えられる。

#### 御笠の森遺跡周辺遺跡の中世～近世の動態

11世紀後半～12世紀前半に川原遺跡と石勺遺跡で遺構が確認されている。川原遺跡では井戸が確認されており、建物は確認されていないが、周辺で集落が発生するものと考えられる。一方、石勺遺跡では溝が確認され、土坑から粘土と棒状土製品が出土したことから、瓦器焼成に係る集落であった可能性もある。村下遺跡では遺構は確認されていないが、中国銭の出土から集落の発生が想定される。

12世紀後半になると、宝松遺跡で区画溝を持った集落が出現する。これは御笠の森遺跡14次調査地でも確認されており、拠点集落としての形成が始まっている。川原遺跡でも大型土坑が確認されており、集落が継続していることが分かる。

13世紀に入ると川原遺跡で集落が継続しており、15世紀には区画溝を持った集落が出現し、18世紀代まで継続する中心的な集落と考えられる。同じ13世紀代には、石勺遺跡で溝や土坑が確認されるが、溝と土坑のみで明確な集落跡は確認できない。この状況は村下遺跡でも同様である。

16世紀代に入ると、川原遺跡の区画溝は継続するが、17世紀に入ると廃絶するようである。一方、瑞穂遺跡ではいつ掘られたかは明らかではないが、16世紀後半の美濃灰釉陶器が出土しており、この時期に牛頸川沿いで新たな土地利用が確認できる。

17世紀になると、川原遺跡で集落が継続し、18世紀代まで続く。17世紀前半には宝松遺跡で区画溝が確認される一方、17世紀後半になると、雑餉隈遺跡で集落が出現し、18世紀にかけて発展すると考えられる。

#### 御笠の森遺跡の地理的概要

御笠の森遺跡の中世から近世にかけての集落の範囲について、方形区画が確認されたのは北側の第12次調査地から第8次調査地までの東西230m、南北300mの範囲とされており、第12次調査地が区画溝の北限であれば東西に細長く集落域が広がっていることになる。

水城東門から博多へ向かう水城官道東門ルートは発掘調査で位置は明らかになっていないが、御笠の森のすぐ西側を通ると推定されている。また、西行法師が記した『筑紫道記』には「三笠の杜の藪を過ぎて」との記述があり、15世紀に博多から太宰府へ向かう街道も御笠の森の近くを通過していたと考えられる。このことから、御笠の森遺跡は福岡平野を南北につなぐ陸上交通路に隣接していたことが分かる。さらに、御笠の森の南側約180mには主要地方道飯塚大野城線が糟屋平野につながる道として明治時代の地図に見える。この道が中世まで遡るかは確認できないが、御笠の森遺跡が福岡平野を東西南北につなぐ道に面していることは重要である。

さらに、御笠の森遺跡の東側は御笠川の氾濫原に面している。御笠川にかかる山田橋付近からは、高麗から招来されたと考えられる13～14世紀代の毘盧遮那仏坐像と仏手が採集されている（註4）。このことと、区画溝が御笠川の近くまで広がることは、御笠の森遺跡と御笠川との関わりを強く感じさせ、山田橋周辺に川舟が行き交いする津があった可能性も想起させるのである。

以上、現時点での御笠の森遺跡の周辺遺跡の動態と御笠の森遺跡の地理的概要を明らかにした。周辺遺跡の動態と御笠の森遺跡の遺構動態と歴史的位置づけについては、最大の区画溝に囲まれる第8次調査の成果報告時にまとめていくことにしたい。

註1 林潤也2005「御笠の森遺跡Ⅱ」大野城市文化財調査報告書第65集

註2 桃崎祐輔2008「中世の棒状鉄素材に関する基礎的研究」『七隈史学』第10号 七隈史学会

註3 大野城市2005「大野城市史 上巻」大野城市史編さん委員会

註4 九州歴史資料館2014 九州歴史資料館平成26年度特別展図録『福岡の神仏の世界』

#### 【参考文献】

日野高志1976「筑前国那珂・原田・粕屋・御笠四郡における桑里について」『佐賀大学教育学部研究論文集』第24集

柴田剛2019「宝松遺跡1」大野城市文化財調査報告書第173集

澤田康夫2020「宝松遺跡2」大野城市文化財調査報告書第178集

国際航業株式会社編2008「川原遺跡1」大野城市文化財調査報告書第78集

石木秀啓2011「川原遺跡Ⅱ」大野城市文化財調査報告書第96集

早瀬賢2014「川原遺跡3」大野城市文化財調査報告書第119集

㈱アーキジオ九州編2016「川原遺跡4」大野城市文化財調査報告書第142集

柴田剛2018「村下遺跡5」大野城市文化財調査報告書第161集

柴田剛2019「村下遺跡6」大野城市文化財調査報告書第172集

㈱アーキジオ九州編2018「雑餉隈遺跡」大野城市文化財調査報告書第169集

林潤也2021「雑餉隈遺跡2」大野城市文化財調査報告書第191集

齋藤明日香2023「雑餉隈遺跡3」大野城市文化財調査報告書第207集

齋藤友紀2014「瑞穂遺跡4」大野城市文化財調査報告書第116集

石木秀啓1996「石勺遺跡1」大野城市文化財調査報告書第47集

丸尾博恵1999「石勺遺跡Ⅳ」大野城市文化財調査報告書第56集

早瀬賢・林潤也2011「石勺遺跡Ⅴ」大野城市文化財調査報告書第97集

# 图 版



(1) 第4次調査 調査地全景 (西から)





(1) 第4次調査 調査地東半部全景 (北から)



(2) 第4次調査 調査地西半部全景 (北から)



(1) 第4次調査 SD01 (南から)



(2) 第4次調査 SD01 (北から)

図版4



(1) 第4次調査 SK02 (南から)



(2) 第4次調査 調査風景



(1) 第7次調査 調査地西半部全景 (東から)



(2) 第7次調査 調査地東半部全景 (西から)





(1) 第7次調査 SD01全景 (東から)



(2) 第7次調査 SD01 a-a' 面土層 (北から)



(1) 第7次調査 SD01 a-a' 面土層 (南から)



(2) 第7次調査 SD01 土層 (北から)

図版8



(1) 第7次調査 SD02 (南から)



(2) 第7次調査 SD02 (北から)



(3) 第7次調査  
SD02 陸橋部 (東から)



(1) 第7次調査 SX03 (南東から)



(2) 第7次調査 SX03 遺物出土状況 (南東から)









# 報告書抄録

ふりがな	みかさのもりいせき							
書名	御笠の森遺跡9							
副書名	第4・7次調査							
巻次								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第208集							
編著者名	石木秀啓・石川 健							
編集機関	大野城市							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1							
発行年月日	2023年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °N	東経 °E	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
御笠の森遺跡 第4次調査	福岡県 大野城市 山田2丁目 227-2	402192		33° 32′ 46″	130° 28′ 24″	1990/6/21 ～7/13	529㎡	共同住宅建設
御笠の森遺跡 第7次調査	福岡県 大野城市 山田1丁目 520-1	402192		33° 32′ 55″	130° 28′ 19″	1987/7 ～8	358㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
御笠の森遺跡 第4次調査	集落	平安時代 ～ 江戸時代	溝 土坑 ピット	須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・輸入陶磁器・国産陶磁器・鉄器	大溝と土坑・ピットが確認された。溝は、一辺70mほどの区画溝の一部と考えられ、17世紀後半に埋没する。ピット・土坑から、平安時代から江戸時代の初めまでの遺物が出土した。			
御笠の森遺跡 第7次調査	集落	縄文時代、 古墳時代、 平安時代	溝 土坑	須恵器・土師器・黒色土器・瓦質土器・縄文土器・弥生土器・輸入陶磁器・瓦・石器	縄文時代晩期の溝、古墳時代の土坑、平安時代の溝が確認された。調査地は湧水し、遺構は少ないことから、水田等に利用されたと考えられる。			
要約	<p>第4次調査では、第3・8次調査で確認された江戸時代前期の区画溝と一連となる集落を囲む溝 SD01と区画溝の内側の遺構群を確認した。SD01からは輸入陶磁器を含む多量の出土遺物があり、最終的な埋没時期は17世紀後半ごろと考えられる。その他の遺構は11世紀後半～12世紀前半のものから17世紀後半のものまで確認された。また、軒丸瓦など奈良時代の遺物も確認されており、今後の調査に期待したい。</p> <p>第7次調査では、溝2条と土坑が確認された。縄文時代晩期にあたる溝は、あるいは水田の周囲に巡らせた水路であったのかもしれない。</p> <p>SX03は古墳時代前期の祭祀遺構と考えられ、古墳時代前期の地域開発に伴う祈りが捧げられたのではなかろうか。平安時代のSD01は流水があり、一部あふれるような状況があったと遺構の上から考えられる。この状況から、周辺は平安時代以降、水田耕作を中心に土地利用が行われた。</p>							

大野城市文化財調査報告書第208集

御笠の森遺跡 9

発行 大野城市  
〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 九州コンピュータ印刷  
〒815-0035 福岡市南区向野1丁目19番1号

